

広島大学審査学位論文

高齢者の結婚生活の継続意志と適応
に関する発達的研究
—関係性ステータスの観点から—

宇都宮博

目次

第1章 本研究の背景と目的	1
第1節 高齢期における配偶者との関係性に関する 実証的研究の動向	1
第2節 結婚生活の継続意志と適応に関する理論 ーコミットメントと親密性をめぐってー	3
第3節 問題の所在と関係性ステータスの有効性	11
第4節 本研究の目的と分析課題	17
第2章 関係性ステータスの測定法の構成と妥当性の検討	20
第1節 関係性ステータス文章完成法 (Relatedness Status-SCT) と評定マニュアルの構成	20
第2節 結婚生活の適応との関連ーステータス間における 配偶者満足度, 夫婦人生の受容の比較検討ー (研究1)	21
第3節 高齢期の全体的適応との関連ーステータス間における モラール, 孤独感の比較検討ー (研究2)	48

第3章 夫婦人生の危機的局面からみた関係性の深化・成熟	61
第1節 高齢期の関係性ステイタスと夫婦人生の移行過程（研究3）	61
第2節 高齢女性における配偶者との関係性と死別に対する準備性 －想定された死別場面での対応を通して－（研究4）	76
第4章 高齢期における配偶者との関係性と性役割の検討 －平等主義的性役割志向性と家事労働の分担－（研究5）	99
第5章 全体的考察	111
第1節 本研究から得られた知見とその成果	111
第2節 本研究の限界と今後の課題	117
引用文献	122
資料	131
謝辞	

第1章 本研究の背景と目的

第1節 高齢期における配偶者との関係性に関する実証的研究 の動向

男女双方の平均寿命の伸びによって、今日では高齢期を配偶者とともに迎えることは、決して珍しい状況ではない。彼らの多くは、長年連れ添ってきた夫婦である。これまでは、結婚生活がいかに長く持続できたかが重要な基準であった。しかし、ライフスタイルや価値観の多様化によって、人生の志向性や幸福感との関連の中で配偶者との関わりを吟味するなどの、いわば結婚生活の質的な側面について議論する必要性が指摘されるようになった。

こうした社会的要請により、すでに定年退職後および高齢期の夫婦を対象にいくつかの研究が行われている（例えば、細江，1980；都築，1984；袖井・都築，1985；河合，1992）。しかしながら、依然として、我が国では高齢期の結婚生活の質に関して十分な研究蓄積があるわけではない。

その背景には、高齢期の家族研究が、介護問題を含む老親との同・別居の規定要因に関するものなど、親子関係に重点を置いてきたことが指摘できる（横山，1993）。さらに、彼らが教育を受けていた時代または結婚生活の初期に優勢であった家族規範は、「血統集団」や「家父長制」（川島，1957）に特徴づけられるように、家族内の縦の人間関係が重んじられていた（直井，1993；高橋，1993）ことも反映していると考えられる。

また、数少ない既存の研究も、配偶者の役割遂行に対する評価や

結婚生活の幸福感といった、自己の受動的側面に焦点を当てたものが大部分を占める。したがって、配偶者と存在する自己のあり方や、夫婦人生を通じて結婚の意味を真剣に探求し、二人の関係を成熟させるといった主体性の側面はあまり注目されてこなかったと考えられる。わずかに、自己の配偶者への関与のあり方を問題とする、下記のような伴侶性（コンパニオンシップ）の研究が散見できる程度である。

この伴侶性の概念は、欧米から輸入されてきたといわれている。当初、その指標はコミュニケーションや一緒にの余暇行動がどれほど頻繁に行われているかといった、行動（可視的）次元だけであった（Blood & Wolfe, 1960）。今日では、相互の関心や理解、またそれにかかわる規範や信念などの意識面、すなわち不可視的次元からも検討されている（高橋, 1980；高橋, 1991）。両次元ともに、結婚満足感と正の相関が確認され（神原, 1996）、結婚生活への適応にとって重要な要因として位置づけられている。このように伴侶性の研究から、関与のあり方が積極的かどうかという視点が、関係性の主体的側面を理解する上で有効であることが示唆されている。

しかしながら、現実生活の関与（その志向性も含めて）だけでは、関係性の主体的側面の理解は不十分であろう。それ以前の根本的な問題、すなわち結婚生活へのコミットメント（commitment）を視野に入れる必要があると考えられる（コミットメントの定義については次節を参照されたい）。結婚して一人前とする考えや、結婚相手とはいかなることがあろうとも生涯添い遂げるべきといったイデオロギーが強く浸透している状況下では、離婚することへの社会的圧力が大きく作用する。とくにイエ制度の影響力が強かった時代にお

いては、結婚生活の継続や配偶者の存在意味など考えることすら許されなかったと考えられる。

しかし、家族の相対化や多様化が認められる今日、コミットメントという本質的な視点から関係性をとらえる必要があるのではないだろうか。離婚率の高いアメリカでは、コミットメントは結婚生活を継続させる中枢的機能として (Rusbult & Buunk, 1993; Bradbury, 1995) , 家族研究者や家族教育の実践家のみならず心理臨床家にも注目されはじめている (Fowers, 1990) 。

第2節 結婚生活への継続意志と適応に関する理論

－コミットメントと親密性をめぐって－

1. コミットメントについての概念的検討

最近の歴史社会学者らによる精力的な研究から、欧米においても恋愛結婚の歴史はそれほど長くないことが明らかにされつつある。すなわち、前近代社会まで恋愛感情は、階級の上下を問わず抑制されていた (Flandrin, 1981) 。愛情を結婚の基礎とする考えは発達しておらず、親の取り決めによる結婚が主流であった。こうした状況下での結婚へのコミットメントは、結婚する二人に永続的に夫婦であり続けることを確認させる宣誓や、法的手続きのために交わされる契約を意味していたと考えられる。

しかし、16世紀から17世紀にかけて、それまでの婚姻制度に忠実である証のコミットメントの中に、当事者がお互いのために行うコミットメントが生まれてくる (Bernard, 1972) 。これは、コミットメントがそれまでの社会秩序の維持のためになされる宣誓や契約といった対社会的機能の概念から、当事者自身の主体性とその質の

多様性をも包含する概念へと発展したことを示唆している。以下、コミットメントの概念は、とくに説明がないかぎり基本的に後者の意で用いる。後者のコミットメントについては、研究者によって若干とらえ方が異なり、これまで様々な定義づけがなされてきた。そこで、それぞれの立場を比較し、概念を整理しておきたい。

コミットメントの概念については、大きく分けて二つの立場がある。その一つは、継続の見込みや期待、意欲など当人の意志に関わる態度変数のみを問題とする立場である（例えば、Surra, Arizzi & Asmussen, 1988 ; Surra & Hughes, 1997）。他方は、そうした態度変数だけでなく、相手に対する愛着や二人の絆に対する結束性や凝集性などの情緒変数を含める立場である（例えば、Sabatelli, Cecil-Pigo & Pearce, 1982 ; Johnson, 1991）。両者の違いは、情緒変数の扱い方にある。態度変数のみをコミットメントとする立場では、情緒変数はコミットメントの構成要素そのものではなく、それに関連した要因として位置づけている。

この概念に対して、これまで我が国では、発達心理学を中心に訳語として“積極的関与”や“傾倒”を用いることが比較的多くあった。しかし、コミットメントの概念は、これまでみてきたように多義的である。そこで、本研究では特定の訳語をあてず、引き続き原語のまま用いることとする。実際、社会心理学の方面では、特定の訳語をあてずそのままコミットメントを使用している。

ここで本研究のコミットメントに対する基本的立場を示しておきたい。本研究では、松田（1996）の概念的検討で示されたコミットメントの定義に従う。すなわち結婚におけるコミットメントとは「結婚生活あるいは配偶者に対して、ある一貫した行動を継続的行

おうとする姿勢」とする。これは、コミットメントを態度変数のみとする第一の立場である。したがって、情緒変数はコミットメントに関わる規定要因（継続的姿勢を支える拠り所）の一つとみなされる。また、コミットメントに基づく関与のあり方は、コミットメント行動（松田，1996）とする。先の伴侶性をコミットメントの概念でとらえれば、コミットメント行動に対応するものと理解できる。

ところで、コミットメントとコミットメント行動、および両者の関連性は、コミットメントの規定要因の質によって異なると考えられる。その意味において、コミットメントのあり方は、個々人のコミットメントを支えている規定要因により特徴づけられる。そこで次に、コミットメントの規定要因の中でも、大変重要な意味をもつものとして注目される親密性の問題を取り上げてみたい。

2 コミットメントにおける親密性の意味

他者との親密な関係性の構築を成人期の主要な発達テーマとして提唱した一人であるErikson（1950）は、親密性の概念を次のように論じている。すなわち、親密性とは「具体的な関係や提携を結び、たとえそのようなかわり合いが重大な犠牲や妥協を要求しても、それらの関係を守り続ける道義的な強さを発揮する能力」（仁科訳，1977, p. 339）を意味する。親密性は成人前期にとくに優勢となる心理社会的課題とされ、その対局には「孤立」が位置づけられている。自我の喪失という不安を抱くことなく、自己のアイデンティティを他者のそれと融合させることができるかが親密性発達の重要な鍵となる。親密性 対 孤立の課題を克服することで、人は愛という人格的活力を獲得できる（Erikson, 1950）。

Eriksonの人生全般を視野に入れた心理社会的発達理論については、今日まで数多くの実証的研究が行われてきたが（鱈・宮下・岡本, 1995a, 1995b, 1997参照），親密性も例外ではない。その中で、中心的な役割をはたしてきた分析枠組みは、親密性ステイタスである。これはOrlofskyら（1973）によって提起されたもので、Eriksonの親密性概念から抽出された構成概念をもとに、親密性の様態を分類するというものである。

実証的研究から、次のようなステイタスが確認されている。それらは、同性の友人をもつとともに異性の付き合いに持続性と深さが備わっている「親密型」、同性の友人はいるが持続的な異性との交際がない「前親密型」、多くの人々と付き合いがあるものの関わりが表層的な「ステレオタイプ型」、異性との持続的な付き合いはあるが関わりの浅い「擬似親密型」、同性異性にかかわらず他者との関わりを避ける「孤立型」である。

さらに、「まざりあいmerger親密型」も確認されている。このステイタスに関しては、WhitbourneとWeinstock（1979）が関与する対象との力関係が対等ではないことを特徴に挙げているのに対し、Levitz-JonesとOrlofsky（1985）は関係の中で自己を埋没させている点にあるとしており、研究者によってとらえ方が異なる。いずれにせよ、このステイタスには特定の異性と持続的な付き合いのあるタイプとないタイプとがあるとされている。

一方、Whiteら（1986）は、結婚生活における親密性の成熟度 intimacy maturityを測定するための尺度を考案し、若年夫婦に実施した。コミットメントは成熟度を構成する指標の一つとして組み込まれている。その深さは、大きく3つのレベルに分類された。両

極をみると、深いレベルのコミットメントの特徴は、結婚生活を単に制度として継続させているのではなく、配偶者の存在自体に価値を見出している点にある。また順境、逆境に関わらず、ともに居続けたいという強い意志が示されていることも重要とされる。

それに対し、低いレベルに評定されたコミットメントは、離婚を考えている、配偶者に依存していない（その人にとって相手との関わりが重要になっていない）、結婚生活を継続する根拠が効率的要因にとどまっている場合などである。この他に、婚外交渉や配偶者の死を強く望んでいる者もこれに当てはまる。

以上みてきたように、コミットメントと親密性は密接なつながりにあるものの、すべてのコミットメントに親密性が備わっているわけではない。また、すべての者にとって、コミットメントに親密性が不可欠というわけではないだろう。そのため、個々人の、コミットメントに関する評価基準は、少なくとも2つのレベルに整理しておく必要がある。

第1のレベルは、構築したシステムの安定に照準を合わせた基準である。この基準に従えば、親密性にもとづく動機は絶対ではない。結婚している方が独りでいるよりも利点が多いという、いわば結婚の機能性が確保されれば、この条件は達成される。親密性の重要性を認識し、相互に関与しあっているカップルは、このレベルをあまり強く意識する必要はなく、システムの安定はむしろ結果として後からついてくるものと思われるかもしれない。

第2のレベルは、パートナーとの親密性を根底とした深い付き合いが、システムの安定にとって不可欠と考えるか否かという基準である。この条件を重視する者にとって、それが欠如した状態は堪え

難い。恐らく同一対象と再体制化を試みるか、形骸化したシステムから離脱する、あるいは親密性の基準を取り払い、第1のレベルを前面に押し出し適応を図るであろう。

この2つのレベルは、山岸（1998）の「やくざ型」コミットメント関係と「恋人型」コミットメント関係の概念に類似している。「やくざ型」コミットメント関係とは、敵対するまたはそのように思われる外部社会に対応する目的で結ばれる提携関係である。そうした、いわば「内集団ひいき」の構造を確保することで、社会的不確実性が軽減される。提携対象の人間性に対する信頼は重要ではなく、現実的な効用が問題とされる。

それに対し、「恋人型」コミットメント関係では、社会的不確実性の軽減は主要な目的ではなく、相互の感情的な絆がもとになっている。「やくざ型」コミットメントは第1のレベルに、そして「恋人型」コミットメントは第2のレベルに相当すると思われる。しかしながら、山岸（1998）のコミットメント関係は、互いの目的が一致していることを前提としており、その点で一線を画す。結婚生活の文脈では、夫妻が共通の目的からコミットメントを有しているとは限らない。

3. 結婚生活の長期的適応におけるコミットメント

結婚生活のコミットメントに関する研究自体は、これまでも比較的多く取り組まれてきた（例えばJohnson, 1991; Stanley & Markman, 1992; Nock, 1995）。しかしながら、発達的研究となると成人前期のコートシップと新婚期に集中し、特定のライフステージに限られてきた。そうした中、永続性の観念の弱まりにともない、

持続的なコミットメントを有するカップルの結婚生活の質に社会的関心が向けられはじめている。特に、男女双方の平均寿命の伸びにより増大傾向にある、高齢期夫婦のコミットメントが注目されている。

RobinsonとBlanton (1993) は、結婚年数が30年以上継続し、なおかつ夫妻がともに結婚生活を幸福に感じているカップル15組を対象に個別の面接調査を行ない、夫婦の絆の強さに関わる諸要因の相互関連性を検討している。対象者の平均年齢は、夫63.5歳、妻61.6歳である。分析の結果、彼らのコミットメントは、基本として社会的規範に支配されたものではなかった。むしろ互いの人格に対しての主体的なコミットメントであった。だが、彼らの中には過去、コミットメントが揺れ動いた時期があったことを報告する者もみられた。その当時、二人をつなぎ止めてくれたのは、結婚という制度や子どもへのコミットメントのおかげであったという。

一方、SwensenとTrahaug (1985) は、同じく高齢期夫婦36組（平均年齢66.7歳、平均結婚年数37.3年）を対象に個別で、結婚した当初と現在のそれぞれのコミットメントを支えている要因をそれぞれ尋ね、人格レベルからの親密性に基づくコミットメント（全人格的コミットメント）の増減によって愛情や問題解決のあり方がどのように異なるかを検討している。結婚した当初に関しては、回想法で測定されている。主な結果を挙げると、次のようになる。(1)多くの夫婦で全人格的コミットメントの衰退とコミットメントの相互性が見出された。(2)全人格的コミットメントの高い者は、そうでない者に比べて、結婚生活上の問題が有意に少なかった。(3)全人格的コミットメントの増加傾向がみられた者は、結婚生活上の問題が少ない

とともに、互いに示す愛情表現も高く示された。

これらの研究は、夫妻がともに幸福感の高い結婚生活を持続するには、基本として人格的なコミットメントの価値を認識し続けることが重要であると示唆している。また前者の研究は、高齢期の結婚生活の質をとらえる場合、単に現在の状態だけでなくそれまでの歴史的背景にも着目する必要性を強く示しているように思われる。後者の研究は、必ずしもすべての夫婦に結婚満足感の低下が見られるのではなく、それは一つの発達の経路にすぎないことを指摘している。すなわち、配偶者選択とともに実際の結婚生活に入ってから互いが二人のあり方について積極的に探求し続ける姿勢が必要であり、それが結婚の成功 (Glenn, 1990) に寄与することを示唆する貴重なデータといえる。

上記の研究から、結婚年数が長期に及ぶ夫婦においても、コミットメントにとって人格的要因が重要であることが推察される。しかしながら、高齢期のカップルのすべてが、人格的要因に根ざした結婚生活を継続しているわけではない。そもそも配偶者との関係性の質は、ある一時点だけをみても各夫婦によりそのあり様は異なる。例えば、LedererとJackson (1968) は、夫妻間の結びつきの機能性、適合性、方向性の観点から類型化を試みている。それによると、結婚生活の質は以下のように大きく4つに分類され、さらにそれぞれ2つの下位タイプが存在する (岡堂, 1991)。

(1)安定し、充足している夫婦

①絶妙な双子—お互いのために生まれてきたような夫婦

②共働的な天才—創造的なチーム作業のできる夫婦

(2)不安定だが、充足している夫婦

- ①暇になると喧嘩をする夫婦－形式的に結婚しているだけの夫婦
- ②鎖につながれた夫婦－必要な忍耐という利子を払って、結婚という質を預けている夫婦
- (3)不安定で、不満のある夫婦
 - ①疲労した口論者－相手の痛みに怒りをぶつける夫婦
 - ②心身症の回避者－怒りを内包した心身症の夫婦
- (4)安定しているが、不満のある夫婦
 - ①陰気な同伴者－報復を恐れて相互批判はしないが、相手に関心のない夫婦
 - ②パラノイドの略奪者－家族以外の他者への批判で結びついている夫婦

また、同一夫婦であってもライフステージによって変化する可能性がある。この点に関し、WeishaussとField (1988) は、結婚生活の長期的な持続のあり方が、①一貫して肯定型、②一貫して中立型、③一貫して否定型、④曲線型 (U字型)、⑤下降型、⑥上昇型、計6つの発達パターンのいずれかで説明できると考えた。そして、結婚年数が長期に及ぶ夫婦 (50年以上) に適用し、下降型を除く、5つのパターンを実証的に確認している。従来の結婚生活の適応に関するライフサイクル研究は、平均的な推移の分析を中心に展開してきた。しかし、今後はこうした個人差に焦点を当てた研究が積極的に取り組まれる必要があるだろう。

第3節 問題の所在と関係性ステータスの有効性

第1節で示した伴侶性の研究からも明らかなように、配偶者との

関係性の主体的側面を検討する上で、現実生活での関与の積極性という基準は不可欠であろう。しかし、それだけでは不十分と考えられる。すなわち、第2節で紹介したコミットメントの視点から関与をとらえると、そのあり方（コミットメント行動に相当）はコミットメントとその背景要因に大きく規定されており、この点を十分考慮する必要がある。とくに結婚生活へのコミットメントの根拠に、配偶者の存在に対する人格的意味づけがあるかどうかは、親密性の生涯発達という点からみて、配偶者選択や新婚期だけでなく高齢期の結婚生活においても根本かつ重要である。したがって、関係性の主体的側面の理解には、「人格的意味づけ」と「積極的関与」という2つの基準が有効であると考えられる。

しかしながら、先行研究では、これらを個別に扱う傾向にあり、両者の組合せについてはほとんど検討されていない。また「人格的意味づけ」について言えば、これまでこの基準は有るかないか、もしくは強い弱いといった一次元的な理解にとどまっていた。そのため、人格的意味づけのない人々の中に、本来それを必要としている（いた）者とそうでない者とが混在している点は、ほとんど吟味されてこなかったといえる。基本姿勢の多様さを視野に入れた、きめ細かな分析が可能となる理論モデルが必要と考えられる。

こうした分析を行う上で、Marcia (1966) の提唱したアイデンティティ・ステータス論は注目に値する。Marcia (1966) は、それまでアイデンティティ達成の測定に用いられていた尺度が、人生の危機的場面での対処のあり方に関するEriksonの考察を十分に反映したものではないと指摘した。そして、アイデンティティ達成の測定には、危機 (crisis) と積極的関与 (commitment) という2つの心

理・社会的基準が必要であると考えた。Marciaは、この2つの基準の組合せにより、「アイデンティティ達成」、「モラトリアム」、「予定アイデンティティ」、「アイデンティティ拡散」の4つのアイデンティティ・ステータスを提示した。「アイデンティティ拡散」は、「危機前」と「危機後」に下位分類される。さらに今日では、従来の「危機前予定アイデンティティ」に加え、危機に対して安易な解決をした「危機後予定アイデンティティ」が存在することも確認されている（Waterman, 1982；岡本, 1986）。

アイデンティティ・ステータス論は、配偶者との関係性発達の測定に応用可能であるとともに、それによって関係性の生涯発達経路の分析を行うことも期待できる。そこで本研究では、配偶者の存在を自己の中に意味づけ、それに基づいて関与している自分自身のあり方を「関係性」と称し、アイデンティティ・ステータス論を参考としながら、その類型化を試みることにした。

図1は、岡本（1985）による中年期のアイデンティティ再体制化過程の図式を参考に作成したものである。図1に示すように、配偶者との関係性発達を左右する重大な岐路は、夫婦を取り巻く生活環境での日常場面において、自分にとっての配偶者の存在意味を人格的次元からとらえる必要性を、認知し続けられているか否かにある。まず、そのことの価値を見失うことなく主体的に探求し配偶者がかげがえのない存在としてとらえながら、情緒的交流や関係の向上に積極的に関与している者が想定される（関係性達成型）。

またこの模索体験、すなわち配偶者の存在を人格レベルから意味づけることが可能かどうかを問い続ける中で、配偶者に対してアンビバレントな感情を抱きながらも積極的に関わろうとしている者（

献身的関係性型) や、かつて真剣に模索していたが、全人格的な肯定的見解を見出だせないとして断念したことで関与が浅くなった者(妥協的關係性型)、さらには否定的見解に落ち着き、積極的に関わりあうことに抵抗感を抱いている者(関係性拡散型)も存在すると考えられる。以上の4タイプはいずれも、配偶者の存在を人格的次元からとらえ続ける必要性を自覚することで生じる模索体験を有する。

しかしながら、こうした模索はすべての者が行うのではなく、はじめから配偶者に対する全人格的な肯定評価や関わりを必要としないために模索体験のない者(独立的関係性型)や、配偶者との積極的な関わりが見られても、人格レベルから意味づけようとする姿勢すなわち主体的な探求がないために配偶者への評価が機能的肯定にとどまっている者(表面的関係性型)も存在するであろう。

このように、配偶者との関係性は、アイデンティティ・ステータス論を援用することで、発達経路の多様性としてとらえることが可能となる。筆者は、この枠組みを「関係性ステータス」と命名したい。表1は、各ステータスの様態を簡潔にまとめたものである。なお、岡本(1985)のアイデンティティ・ステータスとの対応についてあるが、「関係性達成型」が「アイデンティティ達成」に、「献身的関係性型」が「モラトリアム」に、「妥協的關係性型」が「危機後予定アイデンティティ」に、「関係性拡散型」が「危機後アイデンティティ拡散」に、「表面的関係性型」が「予定アイデンティティ」に、「独立的関係性型」が「危機前アイデンティティ拡散」にそれぞれ位置している。

以上、①分析の基準に日常における関与の積極さだけでなく、配

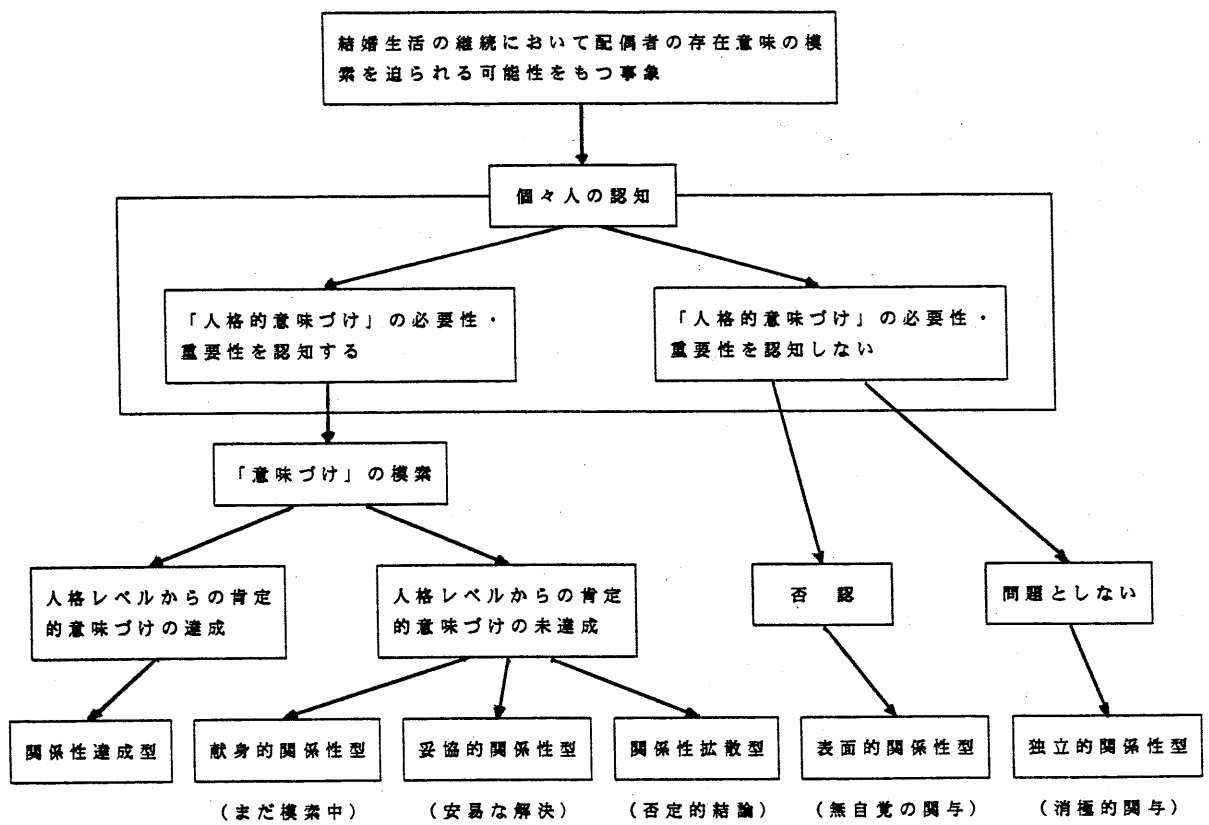


図1 関係性ステイタス発達経路の図式

表1 関係性ステイタスの基準と概要

関係性ステイタス	存在の意味づけ	積極的関与	概 要
(a)関係性達成型 (Relatedness Achiever)	模索体験あり →人格的肯定	している	配偶者の存在やその人との関わり自体に高い価値を見だし、結婚生活の継続にとって重要とみなしている。配偶者との相互交渉は自己の情緒的充足の拠り所であり、配偶者の情緒的充足のための配慮や、関係の改善・向上への努力のための関与に積極的な姿勢がみられる。
(b)献身的関係性型 (Devoted Relatedness)	現在も模索中 (アンビバレント)	している あるいは 積極的関与しようとしている	配偶者の存在やその人と結婚生活を継続する意味について真剣に模索しているが、現段階では配偶者に対し人格レベルでの肯定的見解にいたっていない。しかしながら、配偶者との関係が自己の情緒的充足の拠り所となることを期待しており、積極的に関与しようとする姿勢がみられる。
(c)妥協の関係性型 (Compromised Relatedness)	模索体験あり →中立的	していない	かつて配偶者の存在やその人と結婚生活を継続する意味について模索していたが、配偶者を人格レベルで認めることは不可能であるとする結論にたどりつき、中途半端な状態で終えている。そのため配偶者に対する情緒的期待が低く、配偶者に対する支援的行動も義理や役割的意識によるものであり、積極的な関与は乏しい。
(d)関係性拡散型 (Relatedness Diffusion)	模索体験あり →否定的	していない	配偶者の存在やその人との結婚生活の意味について真剣に模索した結果、否定的見解にいたっており、配偶者の存在が無意味または自己の他の生活領域に悪影響を及ぼしているにとらえている。そのため配偶者への関与はあくまで形式的であり、最低限度に押さえようとしている。配偶者と向かい合うことを放棄している。
(e)表面的関係性型 (Superficial Relatedness)	模索体験なし (機能的肯定)	している	配偶者との関係を好意的に受けとめており、関与に積極的な姿勢がみられる。その点で、関係性達成型と類似した様態のように見える。しかしながら、配偶者の存在意味について真剣な模索体験がないため、肯定的見解を支えているものは結婚生活の継続を通して得られる機能的要素にとどまっている。
(f)独立的関係性型 (Independent Relatedness)	模索体験なし (中立的)	していない	配偶者の存在やその人との関わりは、自己の生活において重要な意味をもっていない。それゆえ人格的な意味づけの必要性を感じておらず、真剣な模索体験はみられない。配偶者に対する情緒的期待が低いいため、配偶者からの相互交渉の要請はあまり好意的に受けとめられていない。

偶者の存在に対する意味づけを含め、その上で②両者の組合せをアイデンティティ・ステイタス論にもとづいて分類することで、関係性発達の方動的側面を理解することが可能になったと考えられる。ただし、アイデンティティ・ステイタスとは、評定基準の設定の仕方大きく異なる点がある。すなわちアイデンティティ・ステイタス論では、“積極的関与”の原語はコミットメントであるが、これは個人的なうちこみやその提示を意味している。本研究の枠組みによれば、これはコミットメント行動もしくは伴侶性に対応する。むしろ関係性ステイタスにおいて、コミットメント自体（基本姿勢）は、アイデンティティ・ステイタス論の前者の基準である“危機”に位置づけられる。関係性ステイタスでは、危機といった大きな節目（ある一時点）だけを想定しているのではなく、日常のあり方をも問題とする。すなわち、配偶者の存在価値を探求しつつ価値を見失わずにいられているかに焦点が当てられる。

第4節 本研究の目的と分析課題

本研究では、①関係性ステイタスの枠組みによる測定法の構成および妥当性を検討するとともに、②各ステイタス間の比較を通して我が国における配偶者との関係性の特質を明らかにすることを目的とした。

特に焦点となるのは、関係性達成型と表面的関係性型の質的相違である。この2つのステイタスは、配偶者の存在を好意的にとらえ積極的に関与している点で類似しているが、後者は人格的次元から問い続ける必要性を意識できていない。両者はともに結婚生活に適応的と予想されるが、それぞれの配偶者が同じように適応できてい

るかどうかは慎重に議論する必要があると考えられる。

ところで、本研究の構成は大きく3つにまとめられる。第1は、「関係性ステータスの測定法の構成と妥当性の検討（2章）」である。ここでは、関係性ステータスを測定するために作成された調査法の構成概念妥当性を、結婚満足感と夫婦人生の受容状況との関連から検証した（研究1）。さらに、各ステータスのモラールおよび孤独感を比較分析し、高齢期の全体的適応との関連からも妥当性を検討した（研究2）。なお、本研究が基本的に採用する方法論は、投影的手法による質問紙調査であるが、研究3は研究1の対象者の一部に対し、半構造化面接を行ったものである。したがって、半構造化面接の方法論的限界から少数の対象者しか扱っていないが、研究3でも質問紙で評定されたステータスが面接調査のそれとどの程度一致しているかという信頼性の問題について検討している。

論文構成の第2は、「夫婦人生の危機的局面からみた関係性の深化・成熟（3章）」である。ここでは、研究3において夫婦人生の主要な移行期での対応のあり方が高齢期の関係性に及ぼす影響について考察し、研究4では高齢女性を対象に配偶者との死別意識と関係性ステータスの関連性について検討した。

そして最後は、夫婦研究のみならず、今日様々な分野で注目されている性役割との関連に焦点を当てた「高齢期における配偶者との関係性と性役割の検討」である（研究5）。具体的には、関係性の発達が平等主義的性役割志向性と家事労働の分担とどのように関連しているかを比較検討した。

本研究の調査対象者は、いずれも自己と配偶者の少なくとも一方が60歳以上か、結婚年数が30年以上の有配偶者である。調査協力の

依頼は、すべて広島県内の高齢者大学の会場で行った。そのため、対象者の抽出方法からして、本研究で得られた結果が我が国の一般的な姿として妥当であるかは議論の余地がある。したがって、この属性の問題を考慮し、本研究の知見は十分慎重に取り扱う必要があると考えている。

なお、本研究の対象者には夫婦セットで得られたデータと個人のみのデータが含まれている。関係性の質的分析といった本研究の性質上、分析対象の数には限界がある。そのため、統計的分析では、夫婦という連関のあるデータも独立のデータとして扱う仮定的処理を施しているので、この問題をあらかじめ記しておきたい。

第2章 関係性ステータスの測定法の構成と妥当性の検討

第1節 関係性ステータス文章完成法 (Relatedness Status-SCT) と評定マニュアルの構成

これまで述べてきたように、配偶者との関係性の様態を実証的に検討していく上で、「人格的意味づけ」と「積極的関与」の基準からなる関係性ステータスの枠組みは有効であると考えられる。そこで実際の測定法であるが、関係性の多様さをきめ細かに分析するためには、本来Eriksonのアイデンティティや親密性の実証研究で多く用いられている半構造化面接による測定が望ましいと考えられる。しかしながら、比較的多くの者からの情報を得るためには、質問紙調査のほうが適切である。

そこで本研究では、質問紙法の中でも投影水準の反応の把握も可能である文章完成法 (Sentence Completion Test, 以下SCTと略す) による評定を採用することとした。この測定方法は、本研究の枠組みの理論的基盤であるアイデンティティ・ステータスを考案したMarcia (1966) も実施している。また、我が国においても、その有効性が確認されている (山本, 1988)。さらに、下仲 (1988) によって、この測定法が高齢者に適用可能であることが明らかにされている。

関係性ステータスを評定するためのSCT構成内容は、まずEriksonの親密性の概念とその実証研究の構成要素、および家族社会学を中心に発展してきたコミットメントに関する理論、実証研究

での指標などを参考とし，関係性ステイタスを評定する上で有効と考えられる S C T 20項目を設定した。内容的妥当性について確認するため，家族心理学を専攻している学生8名に対し，項目および表現の適否を吟味してもらった。量的な問題も考慮に入れ，最終的には表2に示す12項目（人格的意味づけの模索と達成状況：6項目，積極的関与：6項目）で構成された「関係性ステイタス S C T」を作成した。

S C Tに対する反応内容は，作成した評定マニュアル（表3）に基づいて分析し，総括してもっとも適切であると思われるステイタスに位置づけられた。各ステイタスの反応内容の組み合わせ例は，表3に示すとおりである。ここで，関与の積極さの評定基準について若干説明を加えておきたい。積極的関与の基準としては，配偶者との関係に強い関心や魅力を示し，主体的に二人にとって意義ある関わり（自己および配偶者の情緒的安定のための関与や夫婦関係の改善・向上への努力）をしているか否かに着目する。したがって，関わりが形式的（動機が配偶者に対する義理や有配偶者としての役割意識によるもの）であったり，配偶者との関わりからの逃避や攻撃的な姿勢のうかがわれる記述が優勢な場合，積極的関与なしと評定される。

第2節 結婚生活の適応との関連－ステイタス間における配偶者満足度，夫婦人生の受容の比較検討－（研究1）

1. 目的

研究1では，「人格的意味づけ」と「積極的関与」という2つの基準から構成された関係性ステイタス S C T の構成概念妥当性を検

表2 関係性ステイタスSCT

-
1. 私は、現在の妻（夫）と結婚したことについて、_____。（存在の意味づけ）
 2. 妻（夫）の存在は、私の人生において、_____。（存在の意味づけ）
 3. 私が妻（夫）と離婚しないもっとも大きな理由は、_____。（存在の意味づけ）
 4. もし妻（夫）が先にこの世を去った場合、それからの私の人生は、_____。（存在の意味づけ）
 5. 夫（妻）という役割は、私にとって、_____。（存在の意味づけ）
 6. 夫婦の会話は、私にとって_____。（存在の意味づけ）
 7. 私が妻（夫）からしてもらいたいことは、_____。（積極的関与）
 8. 私は、妻（夫）と二人で、_____。（積極的関与）
 9. 私が妻（夫）のために心がけていることは、_____。（積極的関与）
 10. 私は、夫（妻）としていつも、_____。（積極的関与）
 11. 私は、夫婦のこれからについて、_____。（積極的関与）
 12. 私は、夫婦関係が円満であるために、_____。（積極的関与）
-

表3 関係性ステイタスSCT評定マニュアル

ステイタス	概 略	評定基準と反応内容の組合せ例
関係性 達成型	<p>結婚生活の継続において、配偶者の存在を人格レベルから意味づけ続ける必要性を見失わず、絶えずその存在意味を探索している。そうした基本姿勢から、配偶者の存在や二人の生活そのものに高い価値を見いだすこと（人格レベルからの肯定）が可能となっている。必然的に配偶者への関与には積極性が見られる。自己と配偶者の適合性の高さや存在の非代替性を表す記述が特徴的である。</p>	<p>◇存在の意味づけ：人格的肯定</p> <ul style="list-style-type: none"> ①最高のめぐり合わせだったと思う ②かけがえのない存在である ③妻（夫）を愛しているから ④灰色の人生となろう ⑤人生を豊かにするもの ⑥なくてはならない大切なもの <p>◇積極的関与：している</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑦自分の健康に気をつけて、長生きしてほしい ⑧仲良く、相手のことを考えながら楽しく過ごしたい ⑨できるだけ妻（夫）の気持ちに応えようとしている ⑩妻（夫）が幸せであるよう努力している ⑪真剣に考えている ⑫常に誠実であるよう心がけている
献身的 関係性型	<p>結婚生活を継続する上で、配偶者と人格的に結びついた関係性を必要と認知しているために真剣な探求がなされているが、現段階では自己の水準に見合うだけの確固たる肯定的見解に達していない。その模索の表れとして、関与には積極性が見られる（克服できるか否かを見定めるための関与）。記述に肯定的評価と否定的評価とが拮抗して存在しているこ</p>	<p>◇存在の意味づけ：現在模索中（アソバント）</p> <ul style="list-style-type: none"> ①正直言って迷っている ②悩まされることも多いが大切な存在である ③不満に思うこともあるが、一生添い遂げたい ④やはり淋しいだろう ⑤負担に感じることもあるが、重要である ⑥物足りないと感じることがある

(表は続く)

表3 (続き)

	<p>とが特徴的である。</p>	<p><u>◇積極的関与：している もしくはしようとしている</u></p> <p>⑦万事について協力してほしい</p> <p>⑧相手は仕事一筋で、私と喜びをともにしたことは少ない</p> <p>⑨心配りが大切だと思い実行している</p> <p>⑩精一杯頑張っている</p> <p>⑪できれば二人で話し合っていきたい</p> <p>⑫自分のあり方をいつも考えている</p>
<p>妥協的 関係性型</p>	<p>配偶者の存在意味について、かつては探求する姿勢があったが、人格レベルでの肯定的意味づけが不可能であるとの見解からそれを途中で断念している。配偶者に対する期待は模索中に比べると低く、その結果配偶者に対する評価は中立的なものとなっており、関与に積極性は乏しい。中立的な記述の中に模索が不本意な形で終わられたことを強調する、やや否定的な記述（例えば配偶者に対する期待がかつては高かったが現在ではあまり期待していないといった、あきらめを表す記述）が見られる。</p>	<p><u>◇存在の意味づけ：模索後中立的</u></p> <p>①期待していたが、今はあきらめている</p> <p>②子ども3人に恵まれたので、よしとすべきだろう</p> <p>③打算的に考えると、子どもと経済的に安定できるから</p> <p>④迷うだろうが、割り切って生きていく</p> <p>⑤家事（仕事）である</p> <p>⑥格別楽しいものではない</p> <p><u>◇積極的関与：していない</u></p> <p>⑦いつまでも家を守ってもらいたい</p> <p>⑧最近一緒にいる時間が多くなったが、あまり小言を言わないので助かる</p> <p>⑨健康維持に気をつけている</p> <p>⑩人並みのことはやってるつもり</p> <p>⑪特に夢はない</p> <p>⑫妻（夫）のしたいようにさせている</p>

(表は続く)

表3 (続き)

<p>関係性 拡散型</p>	<p>かつて配偶者を人格レベルから受容することは結婚生活の継続に必須条件で、その存在意味を探究し続ける姿勢を有していたが、その探究が無意味であるばかりか悪影響を及ぼすために(否定的結論)、現段階では配偶者との関与を避けるようになっている。配偶者とともに生きることが、自己の他の生活領域にまで否定的な影響力を有し、延いては自己の人生そのものを価値のないものにしていくとする記述が特徴的である。</p>	<p>◇存在の意味づけ：模索後否定的</p> <ul style="list-style-type: none"> ①後悔している ②必要であったかもしれないが、もっとよい伴侶がいたと思う ③夫婦は別れてはいけないと思い、我慢している ④やっと自分のしたいことができる ⑤重荷である ⑥苦痛である <p>◇積極的関与：していない</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑦何も望まないから、干渉しないでもらいたい ⑧そばに居ると辛いので、できるだけ避けている ⑨特に何もしていない ⑩辛い日々を送っている ⑪お先真っ暗である ⑫できるだけ言葉を交わさないようにしている
<p>表面的 関係性型</p>	<p>結婚生活を継続する中で、配偶者の存在意味を真剣に探究し続ける必要性に無自覚で、人格的レベルから意味づけようとする姿勢が形成されていない。自己の人生にとって配偶者の存在は肯定的に作用しているため、配偶者との関わりに対し好意的である。肯定的評価の記述内容は、配偶者が自己にもたらす機能的メリットに焦点が当てられている点の特徴的である。</p>	<p>◇存在の意味づけ：機能的肯定(模索前)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①よかったと思う ②役に立つアシスタント的存在 ③別れてもよいことはない ④大変みじめだと思う ⑤わからない ⑥日常生活のリズムである <p>◇積極的関与：している</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑦我儘をさせてもらっているので、してもらいたいこ

(表は続く)

表3 (続き)

		<p>とはない</p> <p>⑧これからもよろしくという心境</p> <p>⑨できるだけ一緒に行動すること</p> <p>⑩健康に気をつけている</p> <p>⑪自然体でいきたい</p> <p>⑫相手に対して不平不満を言わない</p>
<p>独立的 関係性型</p>	<p>有配偶者という立場や配偶者とともに生きて いることは、自己にとってそれほど重要な意 味をもたない。したがって結婚生活の継続に 配偶者の存在の人格的意味づけは不要であり 、配偶者への評価は中立的なものとなってい る。配偶者に対してそれほど高い期待をして いないため、関与に積極さはみられない。配 偶者に対して特別な感情を抱いていないと思 われる記述が特徴的である。</p>	<p>◇存在の意味づけ：探索前中立的</p> <p>①可もなし不可もなし</p> <p>②人生をともに歩んでいる人</p> <p>③別れる必要がないから</p> <p>④相変わらずこのままだろう</p> <p>⑤生活の一部</p> <p>⑥情報源である</p> <p>◇積極的関与：していない</p> <p>⑦プライバシーに立ち入ってこなければ、それで十分 である</p> <p>⑧気楽に生活したい</p> <p>⑨自由に好きなことをさせている</p> <p>⑩働いている</p> <p>⑪これといって特に考えていない</p> <p>⑫相手のやることに、いちいち干渉しない</p>

注) 反応内容例にある数字は、表2の項目番号を示す。

証することを目的とする。妥当性の指標として、結婚生活への適応状況を取り上げ、これを現在の結婚満足感と夫婦人生の受容の二つの視点から分析することとした。具体的には、関係性ステイタスSCTを高年齢期有配偶者に適用し、評定された各ステイタス間の結婚満足感と夫婦人生の受容を比較検討する。

結果の予想として、結婚満足感は、高年齢期の現時点において、配偶者の存在によってもたらされる影響をいかに評価しているかで異なると考えられる。すなわち得点の高さは、肯定的（関係性達成型、表面的関係性型）、中立的（妥協的關係性型、独立的關係性型）、アンビバレント・否定的（献身的關係性型、関係性拡散型）の順に並ぶであろう。一方、夫婦人生の受容では、現在の意味づけだけでなく、これまでに人格的意味づけの探求の作業がどのように取り組まれてきたが反映されると予想される。この分析によって、結婚満足感で類似した傾向が予想されるステイタス（関係性達成型と表面的関係性型、妥協的關係性型と独立的關係性型、献身的關係性型と関係性拡散型）を分離する必要性が示されると考えられる。

2 方法

(1) 調査対象者

自分自身あるいは配偶者のどちらか一方が少なくとも60歳以上か、結婚年数が30年以上の有配偶者202名（男性94名、女性108名）。その内146名（73組）は夫婦での協力である。調査対象者の属性は表4に示すとおりである。対象者の年齢層で最も多くを占めていたのは60～69歳（55.9%）であった。結婚歴は大多数が初婚者で（92.0%）、結婚年数は40～49年が最も多かった（48.2%）。健康状況に

表4 対象者の基本的属性

年齢層	59歳以下	60～69歳	70～79歳	80歳以上
	15.8%	55.9%	27.7%	0.5%
主観的健康評価	健康	79.6%	病気がち	20.4%
結婚歴	初婚	92.0%	再婚	8.0%
結婚年数	29年以下	30～39年	40～49年	50年以上
	3.6%	43.1%	48.2%	5.1%
同居家族構成	夫婦のみ	息子夫婦と同居	娘夫婦と同居	その他
	53.5%	16.2%	3.0%	27.3%

については、対象者の8割が現在健康であるとみなしていた。同居家族構成では、夫婦のみの世帯だけで半数を占めていた(53.5%)。

(2) 測定法

以下の内容からなる質問紙調査を実施した。

①配偶者との関係性ステイタス

関係性ステイタスSCT12項目。評定の信頼性は、2名の評定者(その内1名は筆者)の一致率によって検討した。評定一致率は84.0%であった。なお、一致しない箇所は協議の上決定した。

②結婚満足感尺度(資料1参照)

関係性ステイタスSCTの構成概念妥当性を検討するために結婚満足感を測定した。結婚生活への適応を測定するための尺度開発は欧米で積極的に行われているが、本研究では我が国でも定年退職後の結婚生活への満足感を測定する指標として、すでにいくつかの先行研究(高橋, 1980; 都築, 1984; 袖井・都築, 1985)で用いられている結婚満足感尺度を用いることとした。これは、Stinnetら(1970)が高齢期の夫婦を対象に考案したMarital Need Satisfaction Scale 24項目の中で、日本の夫婦に適用可能なものを各領域から選定し、それに新たに2項目を加えて作成した13項目からなる尺度である。5件法により測定した。得点範囲は13~65点で、高得点ほど配偶者に対する満足感が高いことを示す。

③夫婦人生の受容

高齢期の結婚生活への適応をとらえる上で、夫婦人生の受容は重要な指標と考えられる。ここでは、自己及び配偶者の人生評価に関する内容のSCT(「妻(夫)の人生は、私からみて_____。一方

私自身の人生は、_____。」)と、夫婦関係が最も円満だったライフステージに関する内容のSCT(「夫婦関係が最も円満だった時期は_____。」)を実施した。これも「関係性ステータスSCT」の構成概念妥当性をみるために採用された。

夫婦人生の受容に関するSCT項目の分析方法は、まず自己及び配偶者の人生評価に関するSCTに関しては、筆者の作成した評定マニュアル(表5の(1))に基づき、それぞれ「肯定的記述あり」と「肯定的記述なし」のいずれかに分類した。夫婦関係が最も円満であったライフステージに関するSCTも、同様に筆者の作成した評定マニュアル(表5の(2))に基づき、現在を最も円満な時期とみなしているか否かに着目した。

夫婦人生の受容に関するSCTの反応内容も2名(その内1名は筆者)によって評定した。評定一致率は、自己および配偶者の人生評価が88.1%で、夫婦関係が最も円満だったライフステージは93.3%であった。一致しない箇所は協議の上決定した。

(3) 手続き

調査は1995年5月から7月にかけて、広島県内の高齢者大学受講者とその配偶者を対象に実施された。質問紙は自宅に持ち帰って記述してもらうため依頼文とともに封筒に入れて配布したが、夫婦で協力してもらえる場合を想定し、各二部ずつ同封した。夫婦内でのプライバシー保護のため、それぞれ一部ずつに封筒を用意した。また配偶者と相談して記述したり相手の記述内容を見ることがないように、同封した依頼文の中に記した。なお、夫婦で回収された質問紙のうち、どちらが高齢者大学受講者のものか、配偶者のものかは不

①自己および配偶者の人生評価

「妻（夫）の人生は私からみて、 _____」
「一方、私自身の人生は、 _____」

(a)成功・充実の記述あり（肯定的）

- ・生きがいがあった
- ・幸福だった
- ・満足
- ・自分の思うようにやってこれた
- ・悔いなし

(b)成功充実の記述なし（否定的，客観・中立）

- ・我慢の人生
- ・平凡な人生
- ・悩み事が多い
- ・暗い人生
- ・哀れな人生
- ・反省が多い
- ・普通
- ・良くもなく悪くもなく
- ・よくわからない
- ・何事も運命

(c)無記入

②夫婦人生を通して見た現在の夫婦関係の評価

「夫婦関係が最も円満だった時期は、 _____」

(a)現在円満

- ・いまが一番
- ・子どもが結婚してから
- ・退職した老後

（表は続く）

表5 (続き)

- ・年々良くなっていると思う
- ・ずっと円満である

(b)かつて円満

- ・結婚当初だけ
- ・30歳まで
- ・夫(妻) / 自分が退職するまで
- ・子どもが中学、高校の頃
- ・10年くらい前

(c)特に円満なし

- ・特に有りませんでした
- ・別になし
- ・あまり感じたことがない
- ・変わらない

(d)無記入

- 注1) ・本来ならば肯定的、客観・中立的、否定的とにわけて細かに分析することが望ましいと考えられる。しかし、ここでは組合せの分析を行うため、可能なかぎり単純化するのが望ましいと考え、肯定的(成功・充実)記述の有無により分類することとした。
- ・配偶者の人生評価は、あくまで配偶者自身がどの程度納得のいく人生を送ってきたかが焦点となる。したがって、たとえ妻(夫)の歩んだ人生が対象者の人生に悪影響を及ぼしていても、妻(夫)自身が思い通りの人生を歩むことができているならば、(a)成功・充実の記述あり(肯定的)となる(例:妻(夫)は好き勝手にやってきた)。
- ・同じく配偶者の人生評価に関して、「感謝している」や「苦勞をかけた」といった、配偶者が自分に果たした貢献を示す記述の扱いであるが、これらは配偶者に対する敬意や自分のあり方の反省のあらわれである。相手の人生の質的側面を肯定的に評価するものではない。したがって、人生が成功・充実であったかという観点からの分類では、記述なし(客観・中立)と判定される。
- 注2) ・現在を円満な時期として位置づけている記述(例:ずっと円満である、年々良くなっていると思う)は、すべて(a)現在円満とする。
- ・明確に円満であることがわからない記述(例:別になし、変わらない)は、(c)円満なしと判定する。

明である。

3. 結果

(1) 関係性ステイタスの人数分布

対象者のステイタス分布は、関係性達成型40.1%（81名）、献身的関係性型7.4%（15名）、妥協的關係性型14.9%（30名）、関係性拡散型5.0%（10名）、表面的関係性型28.7%（58名）、独立的関係性型4.0%（8名）となっていた（表6）。

つづいて基本的属性によるステイタス分布の差異を検討した。その結果、男女間で特徴的な差異が認められた。男女ともに関係性達成型が4割を占めている点では類似しているが、対数線形モデルの分析から、男性は表面的関係性型が女性よりも多く分布していることが示された（ $U=0.65$, $S.E.=0.17$, $p<.01$ ）。一方女性は、献身的関係性型（ $U=0.60$, $S.E.=0.34$, $p<.10$ ）と関係性拡散型（ $U=0.76$, $S.E.=0.45$, $p<.10$ ）が男性よりも多い傾向がみられた。

その他の要因では、主観的健康評価において病気がちの群が健康とする群よりも献身的関係性型と妥協的關係性型を多く含む傾向がみられた（それぞれ $U=0.45$, $S.E.=0.27$, $p<.10$, $U=0.42$, $S.E.=0.22$, $p<.10$ ）。同居家族構成では、夫婦だけの世帯群において、その他の構成群との比較から関係性達成型が多くみられた（ $U=0.37$, $S.E.=0.14$, $p<.01$ ）。また年齢は70歳未満とそれ以上とに分けて、一方結婚年数は40年未満とそれ以上とに分けて検討したところ、70歳以上（ $U=0.55$, $S.E.=0.18$, $p<.01$ ）と40年以上（ $U=0.34$, $S.E.=0.15$, $p<.05$ ）に表面的関係性型が多く分布していた。なお、結婚歴に関しては、本研究の対象者に再婚の者が非常に少な

表6 夫婦の関係性ステイタスの人数分布（）内の数値の単位は%

	全 体	男 性	女 性
関係性達成型	81 (40.1)	37 (39.4)	44 (40.7)
献身的関係性型	15 (7.4)	2 (2.1)	13 (12.0)
妥協的關係性型	30 (14.9)	12 (12.8)	18 (16.7)
関係性拡散型	10 (5.0)	1 (1.1)	9 (8.3)
表面的関係性型	58 (28.7)	38 (40.4)	20 (18.5)
独立的関係性型	8 (4.0)	4 (4.3)	4 (3.7)
合 計	202 (100.0)	94 (100.0)	108 (100.0)

かったため比較を行っていない。

(2) 結婚満足感との関連

ステイタスと結婚満足感尺度の関連性について分析する前に、結婚満足感尺度の信頼性について検討した。まず総得点と各項目得点とのピアソン積率相関係数は、.71から.86の範囲に位置し、すべて有意な値を示していた。さらに、Cronbachの α 係数を算出したところ、.95と非常に高い値を示した。なお、男女の平均得点（標準偏差）は、それぞれ55.23（7.68）、51.31（11.92）で、t検定によって有意差（1%水準）が認められた。また70歳未満と70歳以上の者の平均得点（標準偏差）は、それぞれ52.23（10.70）、55.42（9.04）で、ここでもt検定の結果が有意であった（5%水準）。

そこで次に、各ステイタス別に性と年齢の影響を検討することとした。ここでは男女ともに比較的多く分布している関係性達成型と表面的関係性型で分析可能であると判断した。その結果、いずれのステイタスにおいても、有意差は認められなかった。したがって、少なくとも配偶者の存在を肯定的に意味づけているステイタスでは、性および年齢による差異はないといえる。本研究では、少人数のステイタスが存在するため、各属性別にステイタスと結婚満足感の関連性を検討することは困難であると考えられる。そのため、以下の分析ではステイタスのみを独立変数とする一要因分散分析を実施している。

各ステイタスの結婚満足度得点は、表7に示すとおりである。分散分析の結果、ステイタスによる主効果が認められた。そこでTukey法（5%水準）による多重比較を行ったところ、関係性達成型

表7 各ステイタスの結婚満足度得点の平均値 (SD)

関係性 達成型 (n=81)	献身的 関係性型 (n=15)	妥協的 関係性型 (n=30)	関係性 拡散型 (n=10)	表面的 関係性型 (n=58)	独立的 関係性型 (n=8)	分散分析 F値
59.12 (4.80)	37.20 (9.14)	50.07 (7.46)	29.50 (11.31)	55.33 (6.00)	47.50 (8.67)	61.52***

*** $p < .001$

＞表面的関係性型＞妥協的關係性型・独立的關係性型＞献身的關係性型＞關係性拡散型となっていた。關係性達成型は、すべてのステイタスの中で最も高い得点を示していた。一方、献身的關係性型と關係性拡散型は、他のステイタスに比べて低い得点を示していた。妥協的關係性型と独立的關係性型はともにほぼ中間的な得点を示し、両者に有意な差異は認められなかった。

(3) 夫婦人生の受容との関連

自己および配偶者の人生評価に関しては、成功や充実などの肯定的評価の有無やその組み合わせに着目した(表8)。「ともに成功・充実の人生」と認知している者が最も多く分布していたのは、關係性達成型(39.5%)で、以下表面的關係性型(29.3%)、妥協的關係性型(20.0%)と続いていた。「自己のみ成功・充実の人生」とする者は、全ステイタスを通してそれほどみられなかった。「配偶者のみ成功・充実の人生」とする者は、關係性拡散型(40.0%)が最も多く、献身的關係性型(33.3%)がそれに続いていた。「ともに成功・充実なしの人生」の割合で最も高かったのは、独立的關係性型(62.5%)であったが、他のステイタスも關係性達成型を除き比較的多く分布していた(40.0~51.7%)。

対数線形モデルの分析を行ったところ、關係性達成型の「ともに成功・充実の人生」の多さ($U=0.80$, $S.E.=0.29$, $p<.01$)と「ともに成功・充実なしの人生」の少なさ($U=-0.57$, $S.E.=0.22$, $p<.01$)が有意であった。また、關係性拡散型の「配偶者のみ成功・充実の人生」が多い傾向にあり($U=0.88$, $S.E.=0.49$, $p<.10$)、表面的關係性型の「ともに成功・充実の人生」の多さ($U=0.77$,

表8 各ステータスの自己および配偶者に対する肯定的人生評価の有無の組合せ分布（人数，（）内は％）
（SCT「私からみて，妻（夫）の人生は」，「一方，私自身の人生は」より）

	関係性 達成型	献身的 関係性型	妥協的 関係性型	関係性 拡散型	表面的 関係性型	独立的 関係性型
ともに成功・充実	32 (39.5)	1 (6.7)	6 (20.0)	0 (0.0)	17 (29.3)	1 (12.5)
自己のみ成功・充実	16 (19.7)	3 (20.0)	6 (20.0)	1 (10.0)	9 (15.5)	0 (0.0)
配偶者のみ成功・充実	11 (13.6)	5 (33.3)	6 (20.0)	4 (40.0)	2 (3.5)	2 (25.0)
ともに成功・充実なし	22 (27.2)	6 (40.0)	12 (40.0)	5 (50.0)	30 (51.7)	5 (62.5)
合 計	81 (100.0)	15 (100.0)	30 (100.0)	10 (100.0)	58 (100.0)	8 (100.0)

$S. E. = 0.33$, $p < .05$) および「配偶者のみ成功・充実の人生」の少なさ ($U = -1.34$, $S. E. = 0.44$, $p < .01$) も有意であった。

次に夫婦関係が最も円満であったとするライフステージの分布は、表9に示すとおりである。まず「現在が最も円満な時期」と認知している者の割合は、関係性達成型 (48.1%) が最も高く、以下表面的関係性型と妥協的關係性型がほぼ同じ割合 (順に37.9%, 36.7%) で並んでいた。「かつて最も円満な時期があった」とする者が多く分布していたのは、献身的関係性型 (66.7%), 関係性拡散型 (50.0%), 妥協的關係性型 (46.7%) であった。「とくに円満といえる時期はなかった」とする者の割合は、独立的関係性型 (50.0%) が他のステイタスに比べて非常に高く、献身的関係性型 (33.3%) がそれに続いていた。

対数線形モデルの分析から、関係性達成型の「現在が最も円満」の多さ ($U = 0.86$, $S. E. = 0.29$, $p < .01$) および「かつて最も円満な時期があった」の少なさ ($U = -0.47$, $S. E. = 0.23$, $p < .05$) , 献身的関係性型の「かつて最も円満な時期があった」 ($U = 1.09$, $S. E. = 0.49$, $p < .05$) および「とくに円満といえる時期はなかった」 ($U = 0.99$, $S. E. = 0.52$, $p < .10$) の多さ、妥協的關係性型の「現在が最も円満な時期」の多さ ($U = 0.07$, $S. E. = 0.36$, $p < .10$) および「とくに円満といえる時期はなかった」の少なさ ($U = -0.95$, $S. E. = 0.45$, $p < .05$) , 表面的関係性型の「現在が最も円満」の多さ ($U = 0.54$, $S. E. = 0.30$, $p < .10$) および「かつて最も円満な時期があった」の少なさ ($U = -0.51$, $S. E. = 0.25$, $p < .05$) が示された。

表9 各ステイタスの夫婦関係の最も円満な時期（人数、（）内は％）
（SCT「夫婦関係が最も円満だった時期は」より）

	関係性 達成型	献身的 関係性型	妥協的 関係性型	関係性 拡散型	表面的 関係性型	独立的 関係性型
現在円満	39 (48.1)	0 (0.0)	11 (36.7)	1 (10.0)	22 (37.9)	1 (12.5)
かつて円満	20 (24.7)	10 (66.7)	14 (46.7)	5 (50.0)	15 (25.9)	2 (25.0)
とくに円満なし	12 (14.8)	5 (33.3)	2 (6.7)	2 (20.0)	12 (20.7)	4 (50.0)
無回答	10 (12.3)	0 (0.0)	3 (10.0)	2 (20.0)	9 (15.5)	1 (12.5)
合計	81 (100.0)	15 (100.0)	30 (100.0)	10 (100.0)	58 (100.0)	8 (100.0)

(4) 夫妻間におけるステイタスの組合せと結婚満足感の一致度

これまでの分析では、夫と妻それぞれの関係性ステイタスを検討してきた。しかしながら、夫婦の関係性と結婚生活への適応の関連性を検討する場合、個人レベルの様態を考察するとともに、夫妻間における様態の一貫性やステイタスの組合せの問題についても検討する必要がある。これらの点をふまえ、以下の分析では、カップルで協力の得られた73組146名の夫婦の相互性について検討した。

表10は、夫と妻の、関係性ステイタスの組合せを示したものである。もっとも出現頻度の高い組合せは、「夫と妻ともに関係性達成型」で、全体の3割（23組）を占めていた。その他の出現頻度の高い組合せとしては、「夫と妻ともに表面的関係性型」、「夫が表面的関係性型で妻が妥協的關係性型」がそれぞれ8組ずつみられた。なお、同一のステイタスにある夫婦は、73組中33組（45.2%）であった。

ここで、円満な関係と認知している（肯定的配偶者観をもつ）ステイタスの関係性達成型と表面的関係性型において、その配偶者のステイタス分布に差異がみられるか注目した。その結果、関係性達成型の配偶者のステイタスは、関係性達成型70.8%、献身的関係性型3.1%、妥協的關係性型7.7%、関係性拡散型1.5%、表面的関係性型15.4%、独立的関係性型1.5%で、配偶者も大部分が同じ関係性達成型であった。

それに対し、表面的関係性型の配偶者のステイタスは、関係性達成型22.7%、献身的関係性型11.4%、妥協的關係性型22.7%、関係性拡散型2.3%、表面的関係性型36.4%、独立的関係性型4.6%となっており、表面的関係性型の配偶者は様々なステイタスに散在して

表10 関係性ステイタスによる夫と妻の組合せ分布
 ()内の数値の単位は%

		女 性					
		達成	献身	妥協	拡散	表面	独立
男 性	達成	23 (31.5)	2 (2.7)	2 (2.7)	1 (1.4)	4 (5.5)	0
	献身	0	0	0	1 (1.4)	0	0
	妥協	3 (4.1)	1 (1.4)	2 (2.7)	0	2 (2.7)	0
	拡散	0	0	0	0	0	0
	表面	6 (8.2)	5 (6.8)	8 (11.0)	1 (1.4)	8 (11.0)	1 (1.4)
	独立	1 (1.4)	0	0	1 (1.4)	1 (1.4)	0

注) 達成：関係性達成型 献身：献身的関係性型 妥協：妥協的關係性型
 拡散：関係性拡散型 表面：表面的關係性型 独立：独立的關係性型

いた。対数線形モデルの分析により検討したところ、関係性達成型の配偶者が同じステータスであった割合が有意に多かった ($U=0.87$, $S.E.=0.23$, $p<.01$)。

さらに関係性達成型65名および表面的関係性型44名とその配偶者を対象に、自己のステータスが配偶者の結婚満足感にどの程度関わっているかについて着目した(表11)。その結果、夫妻間の相関においては、関係性達成型の方がわずかに高い結果が認められた。一方、両ステータスの配偶者間の平均値の差を検討したところ、関係性達成型の配偶者の方が表面的関係性型の配偶者よりも有意に高い得点を示していた。

4. 考察

本研究では、配偶者との関係性発達の様態を実証的に検討するために「関係性ステータスSCT」を作成し、高齢期有配偶者に実施した。評定の信頼性は、2名の一致度によって検討したところ、84.0%であった。この一致率は、我が国のアイデンティティ・ステータス(無藤, 1979)および親密性ステータス(高橋, 1988)の研究との比較から、概ね高い信頼性が得られたと考えられる。この結果は、ある程度SCTを構成する内容の妥当性を示すものと考えられる。

次に構成概念妥当性について、結婚満足感と夫婦人生の受容から検討した。まず関係性達成型では、他のステータスに比べ、結婚満足感が最も高く、また高齢期である現在を夫婦関係が最も円満な時期とみなす者、および自己と配偶者の人生をともに成功・充實的であるとする者が多くみられた。関係性達成型の配偶者に対する期待

表 1 1 関係性達成型と表面的関係性型における自己と配偶者の結婚満足感得点の平均値 (SD)

	関係性達成型	表面的関係性型	関係性達成型と表面的関係性型の差 (t値)
自己の満足感	59.12 (4.95)	54.64 (6.32)	4.14***
配偶者の満足感	57.35 (7.57)	51.95 (10.06)	3.03**
自己と配偶者の 相関	$r = .46***$	$r = .40**$	

** $p < .01$ *** $p < .001$

は人格レベルからのものであり、質的に高い要求水準といえる。しかしながら、存在意味を主体的探求する価値を見失うことなく、その水準に見合うだけの相互交渉を積極的に行ったり、相手を受容的に受けとめる基本的姿勢が、最も高い得点に寄与していると考えられる。

一方、表面的関係性型は、配偶者や結婚生活に肯定的見解を有しているという点で関係性達成型と類似したステイタスであるが、このステイタスの配偶者に対する期待に人格的充足の要素は含まれていない。その意味において、質的には低い水準であると考えられる。このように関係性達成型と表面的関係性型とでは、満足感の抛り所が質的に異なることに着目する必要がある。要求水準にそうした相違があったにもかかわらず、関係性達成型が表面的関係性型よりも有意に高得点であったことは、結婚生活への適応を議論する上で、本研究で提起した第一の岐路つまり人格的意味づけの価値に対する基本的姿勢を考慮する必要性を示唆していると考えられる。

また表面的関係性型は関係性達成型と比較して、自己と配偶者の人生の記述でともに成功・充実とする者が少なく、円満な時期は特になかったとする者が多くみられたことも注目される。この結果は、表面的関係性型の、配偶者の存在意味についての主体的探求の乏しさを反映しているのかもしれない。高齢期において、互いの人生を振り返り両者を肯定的に評価する上で、また新婚期から今日に至るまでの道程をふまえて現在の結婚生活を最も円満とみなす上で、人格的次元からの関与が重要な意味をもっていると推察される。

関係性達成型と表面的関係性型の差異は、配偶者のステイタスおよび彼らの満足感でも確認された。関係性達成型では、その配偶者

も関係性を達成する者や満足感が高いのに対し、表面的関係性型では、その配偶者は様々なステータスに散在し、満足感では関係性達成型の配偶者よりも有意に低かった。これらの結果で特に注目されるのは、夫が表面的関係性型の場合、配偶者の人格的意味づけを試みながらも、人格的次元からの解決が不可能との見解から中途半端な結論にとどまっている妥協的関係性型の妻が比較的多くみられたことである。

以上から、人格的次元から配偶者の存在を意味づけている関係性達成型は、配偶者との生き活きとした交流や積極的な関係性の確認・調整を行うことで、互いに高め合うといった発達の相互性をもたらすことが推察される。それに対し、配偶者の存在に対して機能的肯定にとどまっている表面的関係性型は、この傾向が乏しい。表面的関係性型の肯定的見解は、配偶者との相互交流にもとづいたものではなく、自己の認識レベルにとどまっているにとらえられる。

妥協的関係性型と独立的関係性型では、両者は結婚満足感において有意差が認められなかった。これは、両者が中立的な見解で配偶者をとらえているという点で共通しているからであると思われる。そうした中立的意味づけは、平均得点が全ステータスの中でほぼ中間的な位置にあった点からもうかがえる。しかし、両者は夫婦関係の最も円満な時期において顕著な差異を示した。すなわち、妥協的関係性型では独立的関係性型とは対照的に、かつて円満であったとする者が多くみられた。この結果は、妥協的関係性型が過去に安定した関係性を維持していたものの、高齢期に至るまでに何らかの要因によって、配偶者の存在意味に迫る心理的危機に直面し、その克服が中途半端な状態で終了していることを示唆していると思われる。

したがって両者の差異は、存在意味の模索の有無により生じたものと推察される。

関係性拡散型と献身的関係性型はともに、配偶者に対する満足感が低く示された。特に関係性拡散型は、全ステイタスの中で最も低い得点であった。この結果には、これらのステイタスの特質である配偶者に対する否定的意味づけが反映されている。しかし、献身的関係性型には同様に肯定的な見解も混在し、両者が拮抗した状態にある。したがって、献身的関係性型の得点の低さには、ある程度の期待が込められている現在模索中の心境を反映していると思われる。一方、関係性拡散型は、模索後の否定的結論が関係性を支配しているため、その背景は献身的関係性型と大きく異なる。関係性拡散型の得点の低さは、そうした否定的結論を直接表していると考えられる。

ところで、これらのステイタスは、個人の人生評価と夫婦人生の円満な時期の記述においても、不適応的な反応を示した。特に関係性拡散型の個人的人生評価では、「人生が成功あるいは充実しているのは配偶者のみ」とする者と「夫婦ともに成功あるいは充実した人生ではない」とする者で、全体の9割を占めていた。これらのステイタスの者は、自己と配偶者双方のSCT記述内容の関連性にも着目したところ、配偶者の存在により、自己の人生が犠牲を受けたと認知している者が多く、夫婦としての人生のみならず、個人としての適応も困難であることが示唆された。

したがって、人格的意味づけの探求はそれが首尾よく解決できれば、主体的探求のみられないステイタスよりも適応的な結婚生活を送れるようになるが、解決が不十分な場合には逆に不適応的な様態

に陥る可能性がある」と推察される。以上の結果は、概ね関係性ステータスの構成概念妥当性を支持していると考えられる。

第3節 高齢期の全体的適応との関連－ステータス間における モラール、孤独感の比較検討－（研究2）

1. 目的

研究1では、結婚生活への適応に焦点を当て分析を行い、構成概念妥当性を検証した。そこで研究2では、配偶者との関係性が、高齢期の生活全般の質、すなわち全体的適応とどのような関連にあるのかを検討する。適応の指標は、主観的幸福感のほか、高齢期の適応の対人的側面を理解する上で有効とされる孤独感も取り上げることとした。

孤独感の指標は、これまで単一次元の尺度と多次元から構成される尺度とが開発されているが、本研究では落合（1983）によって開発された孤独感尺度を用いる。本尺度はもともと青年期を対象に作成されたものであるが、三宅ら（1997）によって高齢期の孤独感を測定する上でも有効であることが示唆されている。落合（1983）によると、孤独感は共感性（対他的次元）と個別性（対自的次元）から構成される。共感性とは他者と理解・共感する可能性についての考え方であり、個別性は自己と他者とが個別の存在であると自覚している度合を意味する。

本研究では、まずこの孤独感の2次元が高齢期の主観的幸福感とどのように関連しているか検討する。この分析を通して、共感性と個別性のうち、どちらの次元が高齢期の孤独感において優勢的であ

るかを明確化する。高齢期の主観的幸福感の指標は、我が国でも多くの研究で用いられているP. G. C. モラル・スケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale) (Lawton, 1975) を用いることとした。その上で、関係性ステイタスの観点から主観的幸福感および孤独感の2次元を比較検討する。

2 方法

(1) 調査対象者

自己と配偶者の少なくとも一方が60歳以上か、結婚年数が30年以上の有配偶者166名(男性:86名,女性:80名)。研究1とは別の対象者である。対象者の平均年齢は67.3歳($SD=6.28$)で、その配偶者は66.9歳($SD=6.19$)であった。結婚年数は、平均41.6年($SD=7.27$)となっていた。

(2) 測定法

以下の内容からなる質問紙調査を行った。

① 配偶者との関係性ステイタス

関係性ステイタスSCT12項目。評定の信頼性は、3名の評定者の一致率によって検討した。3名中(うち一名は筆者)2名以上が一致した割合は95.2%であった。なお3名とも一致しない箇所は、協議のうえ決定した。

② 孤独感

孤独感尺度LSO (Loneliness Scale by Ochiai) (落合, 1983) を用いた。これは共感性尺度LSO-U 9項目(例えば、「人間は、他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができると思う。」、「私は、

私の生き方を誰かが理解してくれると信じている。」)と個別性尺度LS0-E 7項目(例えば、「人間は、本来ひとりぼっちなのだと思う。」,「どんな親しい人も、結局自分とは別個の人間であると思う。」)からなる。5件法による。LS0を高齢者に適用するため、全16項目について、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行ったところ、2因子が抽出された(表12)。各因子の寄与率は、23.3%と15.1%である。3項目は両因子次元への因子負荷量が低かったために除外したが、因子Iと因子IIは落合(1983)の研究で見出された項目配分にほぼ対応するものであった。Cronbachの α 係数は.86と.71であった。そこで、前者9項目の加算平均値をLS0-U得点、後者4項目の加算平均値をLS0-E得点とした。なお、除外された項目はすべて落合(1983)のLS0-Eに該当していたものである。

③主観的幸福感(資料2参照)

改訂版P. G. C. モラール・スケール(Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)(Lawton, 1975)を用いた。これは17項目からなる。2件法による。本尺度は、我が国においてもいくつかの研究で、高齢者の主観的幸福感の指標として採用されている(例えば、下仲ら, 1990; 長田・長田, 1994)。全17項目について、項目-全体相関を算出したところ、1項目において有意な相関がみられず、他の項目はすべて.41から.64の範囲で有意な相関を示した。そこで、この項目を除外し、他の16項目の加算平均値をモラール得点とした。Cronbachの α 係数は.80であった。

(3) 手続き

1996年7月~9月に、広島県内の高齢者大学受講者に質問紙の入っ

表 1 2 孤独感尺度 (LSO) 因子分析結果 (バリマックス回転後の因子負荷行列)

項 目	因子負荷量		h ²
	F1	F2	
I LSO-U ($\alpha = .86$)			
4 私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている	.75	-.17	.60
6 私の考えや感じを何人かの人にはわかってくれると思う	.75	-.09	.57
14* 誰も私をわかってくれないと、私は感じている	.75	-.33	.67
7* 私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う	.67	-.38	.59
3 私のことをまわりの人は理解してくれていると、私は感じている	.57	-.10	.34
10* 私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う	.56	-.51	.57
2 人間は、他人の喜びや悩みと一緒に味わうことができると思う	.52	-.06	.27
1* 私のことに関身に相談相手になってくれる人はいないと思う	.45	-.36	.33
15 人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う	.42	.09	.19
II LSO-E ($\alpha = .71$)			
9 人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う	.05	.75	.57
5 結局、自分はひとりでしかないと思う	-.13	.71	.52
11 結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う	-.08	.65	.44
16 どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う	.28	.42	.25
残余項目			
8 自分の問題は、最後は、自分で解決しなくてはならないのだと思う	.27	.14	.09
12* 私と全く同じ考えや感じをもっている人が、必ずどこかにいると思う	-.34	-.07	.12
13 私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う	-.12	.14	.03
因子負荷量 ² 乗和	3.73	2.41	6.14
累積寄与率 (%)	23.30	15.09	38.39

注) *は反転項目を示す。

・LSO-U : 共感性尺度, LSO-E : 個別性尺度

た封筒を配布し（配偶者用も同封），自宅に持ち帰って記述してもらった。研究2でも質問紙の回収において，研究1と同様に夫婦内でのプライバシー保護のため，夫と妻別々に封筒を用意した。なお，対象者166名のうち，124名（62組）は夫婦での協力である。

3. 結果

(1) 各変数の相互関連性

本研究で用いた各変数の相互関連性を明らかにするため，各尺度間のピアソン相関係数を算出した。その結果，孤独感尺度の下位尺度すなわちLSO-UとLSO-Eとの間には，有意な負の相関が見出された（ $r = -.29$ ， $p < .001$ ）。また，LSO-Uにはモラルとの間で有意な正の相関が確認された（ $r = .19$ ， $p < .05$ ）。LSO-Eとモラルとの間には相関がみられなかった。

続いて，共感性・個別性とモラルの関連性について，より詳細な情報を得るため，LSO-U・LSO-E得点の高群（第三四分位数以上），低群（第一四分位数以下）をそれぞれ抽出し，モラルの平均得点を比較検討した。なお，LSO-U得点の高群は15点以上，低群は5点以下で，一方LSO-E得点の高群は6点以上，低群は0点以下である。

各群のモラル得点は，表13に示すとおりである。LSO-Uの高群・低群，LSO-Eの高群・低群ごとに， t 検定によって，モラル得点の平均値の差を検討したところ，LSO-Eでは高群と低群との間に有意差がみられなかったが，LSO-Uでは高群が低群よりも有意に高得点を示した。

(2) ステイタスの人数分布

表 1 3 LSO-U・LSO-Eの各高群低群におけるモラル得点の平均値 (SD)

LSO-U			LSO-E		
高 群	低 群	t 値	高 群	低 群	t 値
12.26 (2.64)	10.82 (3.69)	2.15*	11.33 (2.86)	11.60 (3.55)	0.38

* $p < .05$

注) LSO-U : 共感性尺度, LSO-E : 個別性尺度

各ステイタスの人数分布は、関係性達成型55名（男性32名，女性23名），献身的関係性型7名（男性0名，女性7名），妥協的關係性型18名（男性6名，女性12名），関係性拡散型9名（男性0名，女性9名），表面的關係性型65名（男性39名，女性26名），独立的關係性型12名（男性9名，女性3名）であった。

(3) 各ステイタスのLSO-U・LSO-E得点

まず，男女別にLSO-UおよびLSO-Eの平均得点を求め，それぞれt検定（5%水準）を行った。その結果，LSO-Uにおいて有意差が認められた（女性>男性）。そこで次に，各ステイタスごとに性差があるか検討することとした。この分析では，男女ともに比較的多く分布する関係性達成型と表面的關係性型で検討することが可能であると判断し実施した。分析の結果，ともに有意差は認められなかった。したがって，少なくとも配偶者の存在を肯定的に意味づけているステイタスでは，性差がないことが示唆された。

以下の統計処理による分析では，少数のステイタスが存在することをふまえ男女合わせて分析を進めていくが，今後残りのステイタスについても，性差を検討していく必要があると考えられる。なお，ステイタス間における平均得点の比較検討についてであるが，特に人数の少ないステイタスについては考察を慎重に行う必要がある。そこで本研究では，関係性達成型と表面的關係性型を中心に分析を進めていく。

各ステイタスのLSO-UおよびLSO-Eの平均得点は，表14に示すとおりである。ステイタスを独立変数，LSO-U・LSO-E得点を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ，LSO-Eにおいてステイタスの

表 1 4 各ステイタスにおけるLSO-U・LSO-E得点, モラール得点の平均値 (SD)

	関係性 達成型 (n=55)	献身的 関係性型 (n= 7)	妥協的 関係性型 (n=18)	関係性 拡散型 (n= 9)	表面的 関係性型 (n=65)	独立的 関係性型 (n=12)	分散分析 F値
LSO-U	10.89 (5.54)	7.00 (6.08)	10.53 (6.36)	9.11 (6.60)	9.05 (6.47)	6.00 (6.10)	1.69
LSO-E	1.60 (3.88)	1.43 (3.78)	4.39 (2.97)	4.22 (3.11)	2.10 (4.25)	3.92 (3.42)	2.35*
モラール	12.08 (3.14)	10.07 (3.59)	9.69 (3.89)	7.44 (2.60)	11.77 (2.72)	10.59 (3.22)	5.12***

* $p < .05$ *** $p < .001$

注) LSO-U : 共感性尺度, LSO-E : 個別性尺度

主効果が認められた。しかしながら、*Tukey*法による多重比較ではいずれのステイタス間も有意でなかった。モラルについても、同様にステイタスを独立変数とする一要因分散分析を行った。その結果、ステイタスによる主効果が認められた。多重比較 (*Tukey*法)を行ったところ、関係性達成型と表面的関係性型が関係性拡散型よりも有意に高得点を示した (表14)。

(4) 関係性達成型および表面的関係性型とその配偶者との間における相互性

研究2においては、個人レベルの分析から、配偶者の存在を肯定的に意味付けている点で共通の、関係性達成型と表面的関係性型に明確な差異は認められなかった。そこで次に、配偶者との相互性という観点から検討した。

これまでの分析で用いられてきた関係性達成型55名と表面的関係性型65名のうち、それぞれ48名と45名はカップルでの協力が得られている。彼らのデータをもとに、各ステイタスとその配偶者との間で、LS0-U・LS0-E得点およびモラル得点それぞれの相関と平均値の差を検討した (表15)。

その結果、まず関係性達成型とその配偶者との間には、LS0-U得点で正の相関傾向が、さらにモラル得点では有意な正の相関が認められた。なお、いずれの変数においても、配偶者との平均値の差は有意ではなかった。それに対し表面的関係性型とその配偶者との間には、LS0-E得点で有意な正の相関が確認された。またモラル得点では、表面的関係性型の人はその配偶者よりも有意に高い傾向が示された。

表 1 5 関係性達成型および表面的関係性型とその配偶者間における
LSO-U・LSO-E得点, モラール得点の相関係数と平均値の差

	関係性達成型とその配偶者		表面的関係性型とその配偶者	
	相関係数	t値	相関係数	t値
LSO-U	.27†	0.91	.09	-0.77
LSO-E	.01	-1.29	.30*	0.35
モラール	.35*	1.41	-.08	1.72†

† $p < .10$ * $p < .05$

注) LSO-U : 共感性尺度, LSO-E : 個別性尺度

4. 考察

まず高齢期の孤独感の一般的傾向についてであるが、本研究ではその指標として、共感性（対他的次元）と個別性（対自的次元）から構成される孤独感尺度LS0（落合，1983）を用いた。2次元間の相関係数を算出したところ、両者に有意な負の相関が認められた。孤独感の2次元は、高齢者にとって相容れられないものと考えられる。

モラールとの相関係数では、個別性が無相関であったのに対し、共感性は有意な正の相関が示された。また、各次元の高得点者と低得点者を抽出し、モラール得点を比較した結果、個別性は高低に関わらず同程度のモラールを有し、共感性高群と低群の中間に位置していることが明らかとなった。このことは、共感性が高齢期の心理的適応と密接な関係にあることを示唆している。高齢者の孤独感においては、個別性よりも共感性の方が重要な意味を有していると考えられる。

次に、関係性ステイタスの人数分布を検討した。その結果、男女に共通して関係性達成型と表面的関係性型の占める割合が高かった。しかし、男性がこの2つのステイタスに集中していた（82.6%）のに対し、女性は他のステイタスにもかなり分布していた。こうした人数分布の差異は、研究1でも確認されている。本研究からも、女性は男性に比べて個人差が大きいことが示唆された。以下、各ステイタスの孤独感について考察を行っていくが、本研究では結果でも示したように、人数分布の高い関係性達成型と表面的関係性型を中心に比較検討する。

ステイタスを独立変数、孤独感の2次元を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ、いずれにおいても各ステイタス間で有意

差は確認されなかった。ところで、円満な結婚生活と認知している点で共通の、関係性達成型と表面的関係性型は、ともに個別性が低く示された。しかし、この結果から、両者の個別性を安易に同質と結論づけるのは危険であろう。すなわち、図1に示した関係性の発達経路との関連に着目する必要がある。各ステータスの発達経路から、表面的関係性型は個別性の問題をあいまいなままにし、無自覚なままに今日まで至っている可能性がある。それに対し、関係性達成型は個別性を自覚し、別個の存在だからこそ理解し合えるようにあり続けたいとする姿勢が、得点の低さに表れたのかもしれない。

モラールに関して、ステータスを独立変数とする一要因分散分析を行った。その結果、ステータスの主効果が認められ、関係性達成型と表面的関係性型が関係性拡散型よりも有意に高得点であった。研究1の結婚満足感の分析では、関係性達成型がすべてのステータスよりも高得点であったが、今回のモラールでは関係性拡散型との間にのみ有意差が認められ、表面的関係性型との差は有意ではなかった。なお、少数のステータスについて、今回のデータだけで多くを語るのは危険と思われるが、関係性拡散型のモラール得点は、低得点域に集中しており看過できない。このステータスは、結婚生活の満足感とともにモラールにおいても、他のステータスに比べて著しく低かったことから、不適應性が懸念される。

ところで、これまでの分析からは、関係性達成型と表面的関係性型との間に明確な差異は見出されなかった。そこで次に、配偶者との相互性の視点から両者を比較検討することとした。それぞれ、配偶者との間で孤独感の2次元およびモラールの相関と平均値の差を検討したところ、関係性達成型では共感性で正の相関傾向、モラー

ルで有意な正の相関がみられた。またいずれの変数も、平均値の差は有意でなかった。一方、表面的関係性型では個別性で有意な正の相関が示され、モラールで配偶者より有意に高得点の傾向が認められた。

先の個人を対象とした分析から、孤独感のうち、高齢期の心理的適応にとって重要なのは共感性だけであることが明らかとなっている。概して共感性の高い関係性達成型は、それが配偶者と正の相関傾向にあるとともに有意差がなかったことから、高いレベルで結びついているケースが多いと推察される。この傾向は、表面的関係性型には認められなかった。

また、モラールの分析においても、両ステイタス間に異なる結果が示された。すなわち、関係性達成型では、配偶者との間に正の相関にあるとともに、差異が有意でなかった（概してともに高い）。それに対し、表面的関係性型では、配偶者との間に相関はなく、傾向差が認められた。このように、関係性達成型と表面的関係性型とで、配偶者との一貫性が異なるという結果は注目すべきであろう。表面的関係性型は、個人レベルでは関係性達成型と同様に適応的であるが、それが配偶者との相互性を反映したものではないことが推察される。

したがって、高齢期の孤独感において重要な意味を有する共感性とモラールを、カップルレベルで高く持続させるには、配偶者の存在を絶えず人格レベルから価値づけながら、積極的に関与しつづける姿勢が大切であると考えられる。以上の結果から、高齢期生活への全体的適応との関連においても、ある程度関係性ステイタスの妥当性が検証されたと考えられる。

第3章 夫婦人生の危機的局面から見た関係性の深化・成熟

第1節 高齢期の関係性ステイタスと夫婦人生の移行過程（研究3）

1. 目的

1970年以降，成人発達研究は目覚ましい発展を遂げた。特に注目すべきは，人格の生涯発達経路や発達の移行期の構造が解明されるようになってきた点であろう（例えばMarcia, 1966；Levinson, 1978；岡本, 1985；Reinke et al., 1985）。例えば，Marcia（1966）によって考案されたアイデンティティ・ステイタスの研究では，彼自身による縦断的研究（Marcia, 1976）を始めとして膨大な量の研究がなされた。そして，アイデンティティは青年期に形成された後，成人期においても発達・変容を遂げることが実証された。さらに，成人期における発達経路の多様性を視野に入れた理論モデルも構築されてきた（Whitbourne & Weinstock, 1979；Waterman, 1982；岡本, 1994）。

配偶者との関係性も，こうした生涯発達の視座から取り組む必要があると考えられる。なかでも，高齢期はどのライフステージにもまして，配偶者との死別の問題を現実的なものとして受けとめ，過去の人生の統合を視野に入れた夫婦生活を展望しなければならない時期であり，その重要性が指摘される。

しかしながら，これまでの発達心理学研究では，他者との関係性は個としての自立や発達に比べて注目されることが少なく（高橋・柏木, 1995），長期にわたって構築される配偶者との関係性の生涯

発達の過程の分析はこれまで行われていない。そこで研究3では、高齢期の配偶者との関係性ステータスと、生涯発達の要因との関連を検討することとした。

具体的には、配偶者選択と夫婦人生の主要な局面でのあり方は高齢期の結婚生活の適応と成熟に重要な意味を有するとの仮定から、以下の3点を研究3の目的とした。(1)配偶者選択期における意思決定のあり方と高齢期の関係性ステータスとの関連性を検討する。(2)夫婦人生の転機における心理的移行過程の特徴を明らかにする。(3)夫婦の関係性ステータスの観点から、夫婦人生の節目(転機)への対応のし方を分析し、高齢期における関係性の発達・統合のあり方について検討する。

2 方法

(1) 調査対象者

対象者は、広島県在住の高齢者大学受講者とその配偶者26名である(表16)。対象者の平均年齢は67.2歳(56~78歳の範囲)、配偶者の平均年齢は66.0歳(56~79歳の範囲)であった。また結婚生活期間の平均年数は41.7年(31~52年の範囲)、結婚状態は2名の再婚者の他はすべて初婚者であった。なお本研究の対象者は、研究1において実施した質問紙調査の際に、本研究の主旨を理解した上で協力の意志を示した者である。

(2) 測定法

以下の質問項目からなる半構造化面接を実施した。

面接質問項目：①配偶者選択期の結婚への姿勢、②配偶者との関

表16 調査対象者のプロフィール

個人 事例番号	カップル 事例番号	性別	自己の 年齢	現在の職業状態 (退職年齢)	最終学歴	結婚状態 (結婚年齢)	配偶者 の年齢	子どもの有無 (年齢)	同居家族
1	①	男	75	無職(65)	商業学校	初婚(50)	72	♀(50) ♀(47) ♂(38)	夫婦のみ
2	①	女	72	無職(-)	女学校	初婚(同上)	75		
3	②	男	75	無職(65)	旧制中学	初婚(49)	71	♂(47) ♀(45) ♀(43)	夫婦のみ
4	②	女	71	無職(-)	女学校	初婚(同上)	75		
5	③	男	62	自営業(-)	高等学校	初婚(35)	61	♀(33) ♂(30)	夫婦と夫の 母親(92)
6	③	女	61	無職(60)	短期大学	初婚(同上)	62		
7	④	男	70	会社員(55)	専門学校	初婚(43)	66	♂(41) ♂(39)	夫婦のみ
8	④	女	66	無職(-)	女学校	初婚(同上)	70		
9	⑤	男	70	農業(-)	専門学校	初婚(42)	65	♂(43) ♀(40) ♀(38)	夫婦のみ
10	⑤	女	65	農業(-)	女学校	初婚(同上)	70		
11	⑥	男	67	無職(58)	旧制中学	初婚(39)	61	♀(36) ♀(31) ♀(27)	夫婦と三女
12	⑥	女	61	無職(-)	高等学校	初婚(同上)	67		
13	⑦	男	66	役場(60)	農業学校	再婚(37)	59	♀(42) ♀(39) ♂(35)	夫婦のみ
14	⑦	女	59	パート(-)	短大	初婚(同上)	66		
15	⑧	男	61	無職(60)	高校中退	初婚(31)	56	♂(31) ♀(29) ♂(27)	夫婦と三男
16	⑧	女	56	自営業(-)	中学校	初婚(同上)	61		
17	⑨	男	71	農業(-)	農業学校	初婚(48)	69	なし	夫婦のみ
18	⑨	女	69	農業(-)	女学校	再婚(同上)	71		
19	—	男	78	無職(75)	商業学校	再婚(39)	58	♂(51) ♀(50) ♂(38) ♀(34)	夫婦のみ
20	—	男	70	無職(52)	旧制中学	初婚(42)	60	♂(41) ♀(39) ♀(36)	夫婦のみ
21	—	男	66	無職(57)	専門学校	初婚(40)	61	♀(35) ♀(32)	夫婦と夫の 母親(92)
22	—	男	69	無職(60)	農林学校	初婚(44)	65	♀(42) ♀(38)	夫婦のみ
23	—	男	75	無職(55)	専門学校中退	初婚(48)	67	♂(47) ♀(43) ♀(41) ♀(37)	夫婦のみ
24	—	男	61	無職(60)	大学	初婚(33)	63	なし	夫婦のみ
25	—	女	68	農業(-)	女学校中退	初婚(52)	79	♂(51) ♀(48) ♀(45) ♀(44)	夫婦のみ
26	—	女	62	無職(58)	大学	初婚(38)	65	♀(37) ♀(31)	夫婦と娘家 族

注) ・事例No.15, 16, 20, 22は、同一敷地内に長男家族が居住している。
 ・事例No. 5, 6, 11, 12, 15, 16の末子は、独身である。
 ・事例No.19の子どものうち、年長の二人は前妻との間に生まれた子どもである。

係性の転機（個人としての危機における配偶者の存在およびそれとの関わりの位置づけ，夫婦としての人生の節目，自己あるいは配偶者の少なくとも一方が認知した離婚の危機などについて）の有無とその後の関係性変容過程。③高齢期における配偶者との関係性ステイタスの様態。なお③については，すでに研究1で分析している。そこで今回の面接調査では，研究1から得られたSCTの反応内容をもとに，その詳細を尋ねるかたちをとった。

分析の視点：①は，自らの意志で配偶者選択や結婚の意思決定を行い，家庭建設に意欲的であるなどの結婚に対する主体性の有無と，結婚を決意した要因に非代替的と思われる条件（情愛的要因）が位置づけられていたか否か，という2つの基準から類型化する。②は，夫婦としての人生の節目，自己あるいは配偶者の少なくとも一方が認知した離婚の危機，個人としての危機における配偶者の存在やそれとの関わりの位置づけなどの描写を時間軸にそって整理・分析し，関係性の発達の移行期にみられる共通性と個別性に着目する。まず以上の観点から質問項目①および②を個別に分析し，その上で③との関連性を検討する。

(3) 手続き

面接は対象者の自宅もしくは指定された場所において実施され，所要時間は1回当たり平均2，3時間，面接回数は1，2回であった。実施時期は1995年7月から11月である。

3. 結果

(1) 高齢期における配偶者との関係性ステイタス

本研究の対象者のステイタスは、研究1において、関係性達成型（9名）、献身的関係性型（1名）、妥協的關係性型（3名）、関係性拡散型（2名）、表面的関係性型（10名）、独立的関係性型（1名）と分類されていた。しかしながら、面接調査において、それぞれの記述内容について確認した結果、異なるステイタスの方が適切であると考えられた者が、男性に1名、女性に2名みられた。その男性は表面的関係性型から関係性達成型へと変更された。一方女性の2人はそれぞれ関係性拡散型から妥協的關係性型へ、関係性達成型から献身的関係性型へと変更された。その他の23名は、すべてSCTによる評定が妥当であると考えられた。最終的に決定されたステイタスの分布は、表17に示すとおりである。

(2) 配偶者選択期の意志決定と高齢期の関係性ステイタスの関連性

配偶者選択の意志決定は、「結婚への主体性」と「結婚相手の非代替性」の2つの観点から分析したところ、以下の4つのタイプが見出された。各タイプの概要は、以下のとおりである。なお、評定の信頼性は2名（うち1名は筆者）の一致率によって検討したところ、88.5%であった。一致しない箇所は、協議のうえ決定した。

(a)主体的情愛的結婚型（2名）：結婚は、自己の人生において重要な意味をもち、結婚前の生活の大きな関心事となっていた。したがって理想的な配偶者像や自分が築く家庭生活の展望を積極的に考えるなどの、結婚への主体性がみられる。配偶者選択の基準には、とりわけ配偶者との情愛的関係を築けるといった確信が重要視されており、実際の結婚はそれに見合ったものである。

(b)主体的機能的結婚型（3名）：(a)型と同様に、結婚する前に配

表17 関係性ステイタスの人数分布

ステイタス	ステイタスの評定基準		人数分布
	配偶者の存在の意味づけ	積極的関与	全体（男性，女性）
(a)関係性達成型	模索体験あり →人格的肯定	している	9（5，4）
(b)献身的関係性型	現在模索中 （アンビバレント）	している あるいは しようとしている	2（0，2）
(c)妥協的關係性型	模索体験あり →中立的	していない	4（1，3）
(d)関係性拡散型	模索体験あり →否定的	していない	1（1，0）
(e)表面的関係性型	模索体験なし （機能的肯定）	している	9（8，1）
(f)独立的関係性型	模索体験なし （中立的）	していない	1（0，1）

偶者選択や結婚後の家庭生活のあり方について積極的に模索し、自分なりの見解をもっている。しかしながら、実際に結婚した相手に対して非代替性は弱く、親の期待や自己の経済的安定など結婚の機能的利点が、その大きな要因である。

(c)受動的情愛的結婚型（6名）：自分が結婚することの自覚が乏しく、結婚に対しての自己吟味の経験もそれに基づく自分なりの見解も有していない。しかしながら、配偶者とは結婚する以前から情愛的関係を築いており、なりゆきなどの理由により、恋愛から結婚へと移行したものである。

(d)受動的機能的結婚型（15名）：(c)型と同様に、年齢的にまだ早いといった意識や結婚への期待のなさなどから、結婚を自分の問題として受けとめていない。そのため、結婚に対して消極的な姿勢である。結婚相手と情愛的な関係を築いていないだけでなく、配偶者選択の基準として情愛的関係の視点そのものももたないままに結婚へと移行したため、非代替性の感覚は乏しい。

表18は、対象者が回想した「配偶者選択に対する自己のあり方」の各タイプが、現在どのようなステータスに移行しているかをみたものである。配偶者選択期に主体性のみられた(a)主体的情愛的結婚型と(b)主体的機能的結婚型の者は、高齢期ではすべて関係性達成型に到達していたが、主体性のみられない(c)受動的情愛的結婚型と(d)受動的機能的結婚型は、高齢期において様々なステータスに分布していた。

(3) 夫婦人生の転機における関係性発達の展開過程

次に、高齢期に回想された、夫婦人生の転機における関係性発達

表18 配偶者選択での自己のあり方と高齢期における
関係性ステイタスとの関連性（人数）

配偶者選択での自己のあり方	高齢期における夫婦の関係性ステイタス
・主体的情愛的結婚型（2）	・関係性達成型（2）
・主体的機能的結婚型（3）	・関係性達成型（3）
・受動的情愛的結婚型（6）	<ul style="list-style-type: none"> ・献身的関係性型（2） ・表面的関係性型（3） ・妥協的關係性型（1）
・受動的機能的結婚型（15）	<ul style="list-style-type: none"> ・関係性達成型（4） ・妥協的關係性型（3） ・関係性拡散型（1） ・表面的關係性型（6） ・独立的關係性型（1）

の展開過程について考察した。夫婦人生に大きな節目があったと回答した14名のうち、夫婦の節目を夫婦関係の転機（発達の危機）とみなし、主体的に関与した者が6名みられた。これらの事例には、表19に示すように非常に類似した展開過程が認められた。

例えば、事例26の女性は夫の町議会議員落選にともない、自分の生き方の新しい方向づけを迫られたとき、自分自身の今後の社会生活でのあり方を模索するだけでなく、配偶者とともに存在している自己やこれらからの夫婦としてのあり方についても真剣に目を向けていた。彼らに共通しているのは、このように自分のあるいは配偶者の個人的転機（危機）を、夫婦関係の転機としても認知し、積極的にその解決に取り組んでいたことである。なお関係性の展開過程には、事例26の女性のように何らかの個人的事象を、はじめから積極的に夫婦関係上の問題としてみなすことで生じるタイプと、事例12の女性のように、配偶者の生活構造の大幅な変化にともなって、自分の生活の安定が脅かされるという感覚を経験したがために生じるタイプとがある。

いずれにせよ、その後の展開過程は一定の段階をたどっていた。その過程は時間軸にそって考察すると、「Ⅰ個人の内的危機を認知する段階→Ⅱ個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階→Ⅲこれまでの夫婦関係を見つめ直す段階→Ⅳ夫婦関係を修正・向上させる段階→Ⅴ人格的關係としての安定とそれにもとづく積極的関与の段階」の5つの段階からなると理解できた。

(4) 高齢期の関係性ステイタスと夫婦人生の転機の関連性

表20は、高齢期の各ステイタスが夫婦人生の転機をどのように体

表19 夫婦人生の転機における関係性発達の開閉過程

段階	内 容	事例12 (61歳, 女性, 専業主婦)	事例20 (70歳, 男性, 元公務員)	事例26 (62歳, 女性, 元小学校教諭)
I	個人の内的危機を認知する段階	夫の定年退職。	娘(末子)の結婚。	夫の町議会議員選挙への出馬。
II	個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階	「夫の色々な悪い面が見えてきた。」夫の生活構造の変化により、自分の生活の安定が脅かされ、夫の退職を自分の問題として認知した。	「責任を果たしたという安心感、しかも夫婦共通のね。夫婦共通の人間の責任を果たしたなあ。」自分の親体験を語る上で、配偶者の存在を欠くことはできなかった。	夫の選挙活動のために定年を前に57歳で教員生活にピリオドをうち、全エネルギーを注ぐが夫は落選。夫婦ともに、それともなう挫折感を経験した。
III	これまでの夫婦関係を見つめ直す段階	「その時点では夫には言わなかったが離婚も考えた。」「このままではいけないと思った。」夫が退職する前の生活と退職してから現在にいたるまでの生活をふりかえり、両者を照らし合わせた。	「よかったなあ、夫婦二人で今日までやってきて。」これまでの二人の人生の歩みをふりかえり、その価値の重みをかみしめた。	「これから夫婦でどう生きていこうか、主人をどう活かしていこうかと考えた。」自己と配偶者の互いの人生が、これまでのあり方では支えきれなくなったことを実感した。
IV	夫婦関係を修正・向上させる段階	「通信教育の大学入学と、東洋医学の学習を二人で始めた。」配偶者との関係から回避するのではなく、二人の共有できる活動を積極的に見つけた。	「ここで夫婦になったという因縁を喜ぼうじゃないか。」すべての子どもが巣立った後の残された夫婦人生に目を向けて、より一層夫婦二人で念仏に励むようになった。	「自分の不徳によるものと反省し、いろいろと勉強するようになった。」個としての、あるいは夫婦としての人生の、新たな方向性をみつけるために、主体的に学習活動に励むようになった。
V	人格的關係としての安定とそれにもとづく積極的関与の段階	「夫婦の心理的な接点がある。(夫が)いなければ生きていけないだろう。いるだけで感謝である。」	「夫婦二人で念仏を喜んでいる。はあ、これが夫婦なんだと。他の誰よりも心が通い合っている。とって替えられない(存在となっている)。」	「(夫の落選により二人とも無職となって、)夫に対して尽くしたいという自分の気持ちが高まった。いまは幸せ。」

注) 「」内は、対象者の言葉をそのまま掲載している。
 ()内は、筆者が対象者に対して不明瞭な点を尋ね、確認できた内容を補足的に追加したものである。

験してきたかについて示したものである。配偶者との関係性発達の展開過程の5段階に到達した者は、高齢期ではすべて関係性達成型に属していた。彼らは、そうした夫婦人生の節目に今なお積極的な意味を見出しており、そのことが彼らの配偶者との関係性の統合に重要な意味を有していることが示唆された。

しかしながら、その他のステイタスの者には、異なる様相がみられた。それらの代表的な事例は、表21に示すとおりである。関係性達成型を除く他のステイタスは、概して個としての人生の節目はあっても、夫婦としての節目を見出していなかったり、たとえ夫婦の節目があっても、関係性確立のための関与が乏しかったために、第I段階（個人の内的危機を認知する段階）あるいは第II段階（個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階）にとどまっていた。なお、関係性達成型であっても、先の6名以外の者（3名）は展開過程の5段階に到達していなかった。

4. 考察

はじめに、配偶者選択の意志決定と高齢期の関係性ステイタスとの関連性について考察する。本研究では、配偶者選択の意志決定の様態を「結婚への主体性」と「結婚相手の非代替性」の観点から分析した。その結果、主体的情愛的結婚型（2名）、主体的機能的結婚型（3名）、受動的情愛的結婚型（6名）、受動的機能的結婚型（15名）の4タイプに分類された。

この4タイプ別に、高齢期の関係性ステイタスの人数分布に着目したところ、結婚に主体的であった主体的情愛的結婚型と主体的機能的結婚型の者は全員関係性達成型であった。対照的に、主体性の

表20 夫婦人生の節目における各ステイタスの対応状況（人数）

ステイタス	関係性発達の展開過程における到達状況 ¹⁾							計
	*	I	→ II	→ III	→ IV	→ V		
関係性達成型	2	1	0	0	0	6	9	
献身的関係性型	0	1	0	1	0	0	2	
妥協的關係性型	1	1	2	0	0	0	4	
関係性拡散型	0	1	0	0	0	0	1	
表面的関係性型	2	3	4	0	0	0	9	
独立的関係性型	0	0	1	0	0	0	1	

注) ・* : 個人の内的危機も夫婦人生の節目もなし

I : 「個人の内的危機を認知する段階」まで到達

II : 「個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階」まで到達

III : 「これまでの夫婦関係を見つめ直す段階」まで到達

IV : 「夫婦関係を修正・向上させる段階」まで到達

V : 「人格的關係としての安定とそれにもとづく積極的関与の段階」まで到達

・IIからIVの合計が夫婦人生に大きな節目があったと回答した14名である。

表21 夫婦人生の節目における対応のあり方

段階	内 容	関係性達成型 事例2 (72歳, 女性, 専業主婦)	献身的関係性型 事例16 (56歳, 女性, 自営業)	表面的関係性型 事例9 (70歳, 男性, 元土木業)
I	個人の内的危機を認知する段階	自分の交通事故による入院。	夫の定年。	実母の死。
II	個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階	「申し訳がないという思いと強く感謝する気持ちでいっぱい。」自分の病気の回復に努める中で、夫の自分への姿勢に目をむけた。	「せっかく主人が定年になったんだから、私も仕事を辞めて一緒にいるんなことをした方がいいかなあという気持ちはあるが、毎日一緒に家にいるのも嫌だろうなあと思ったりもしている。」配偶者の人生の節目の到来にアンビパレントな感情を抱き、それを自己との関わりの中でどのように位置づけるべきか模索した。	「母親がいる間は、母親が（不満の対象として）前面にでてたんですよ。それが、母がいなくなってから、私にでてきている。」妻の自分に対するあり方の変化に気づきながらも、自分のこれまでのあり方の問い直しや、二人の関係の改善に向けた積極性はみられない。
III	これまでの夫婦関係を見つめ直す段階	「夫がもし病気で倒れたとき、自分がしっかりと見てあげられるか心配。」自分の入院にともない、夫の入院した場合のことを考えるが、これまでの自分の生き方をふりかえり、不安に思った。	「でも、今までなかなかゆっくりする暇がなかったから…いつまでも元気でいられるかわからないのなら、（仕事を）辞めた方がいいのかなあと思う。何かもしあった時、意外と何か（後悔のような思いが）残るのではないかと思ったりする。」夫婦共働きによる、これまでの夫婦のすれ違いを顧みて、二人のこれからのあり方を真剣に考えはじめているが、現段階では一定の結論が出ていない。	
IV	夫婦関係を修正・向上させる段階	「（いざというときしっかりと尽くすことができるか）心配だからこそ、これから一層夫を大切にしなければいけないという思いを強く感じるようになった。」これからの自分の夫に対する基本的姿勢の確認。		
V	人格的關係としての安定とそれにもとづく積極的関与の段階	「夫婦の絆や夫の存在の有り難さをかみしめることができた。」		

注) 「」内は、対象者の言葉をそのまま掲載している。
 () 内は、筆者が対象者に対して不明瞭な点を尋ね、確認できた内容を補足的に追加したものである。

乏しい受動的情愛的結婚型と受動的機能的結婚型の者は様々なステイタスに分散していた。主体的情愛的結婚型と主体的機能的結婚型が、高齢期で全員関係性達成型であったことは、結婚生活の長期的適応にとって、配偶者選択の主体性がいかに重要であることを示唆している。一方、配偶者選択に主体的でなかった者の中に、関係性達成型が4名いたことも注目すべきである。彼らは、実際の結婚生活に入って配偶者との関係性を主体的に構築していったものと推察される。

次に夫婦人生の節目の有無とそこでの関係性変容過程について考察する。本研究の対象者26名のうち、夫婦人生の節目を通じて関係性の発達がみられた者が6名認められた。彼らはいずれも関係性達成型であった。この6名にみられた関係性の変容を時間軸にそって分析したところ、「Ⅰ個人の内的危機を認知する段階→Ⅱ個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階→Ⅲこれまでの夫婦関係を見つめ直す段階→Ⅳ夫婦関係を修正・向上させる段階→Ⅴ人格的關係としての安定とそれにもとづく積極的関与の段階」の5つの段階が共通して確認された。

岡本（1985）は、中年期の心理的変化の特徴を分析し、アイデンティティの再体制化過程「第Ⅰ段階：身体感覚の変化にともなう危機期→第Ⅱ段階：自分の再吟味と再方向づけへの模索期→第Ⅲ段階：軌道修正・軌道転換期→第Ⅳ段階：アイデンティティ再確定期」を見出だしている。本研究で見出だされた関係性発達の展開過程が、このような人生の発達の危機期におけるアイデンティティ発達の展開過程と類似していることは非常に興味深い。しかしながら、本研究で示された第Ⅱ段階（個人の内的危機を夫婦関係の問題として位

置く段階)は、関係性の発達に特有の段階であると考えられる。個人の節目が、関係性の転機となるためには、第Ⅰ段階(個人の内的危機を認知する段階)から第Ⅱ段階(個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階)へと移行する必要性を認知しなければならないことが示唆された。

なおこの展開過程は、配偶者の人格的意味づけが確認されていない他のステータスでは、夫婦関係の危機の認知が乏しい、または危機体験が関係性の成熟に結びついていないことも明らかとなった。特に、配偶者を肯定的に意味づけている点で、これまで同一集団とみなされがちであった関係性達成型と表面的関係性型の間で、夫婦人生の節目の対応に相違が認められたことは注目すべき結果といえる。両者の相違は、夫婦の関係性発達の方向性を左右する第一の経路である、人格的意味づけの模索のあり方を反映しているものと理解できる。

しかしながら、関係性達成型にも夫婦人生の節目について言及しない者が3名みられた。これはどのように説明できるであろうか。WhitbourneとWeinstock(1979)は成人期のアイデンティティ発達を議論している中で、成人期のアイデンティティ達成型には、すでに解決済みの事象に関して吟味しないタイプがあることを示唆している。本研究で、言及のみられなかった関係性達成型3名は、このタイプに相当するものと推察される。

以上みてきたように、本研究を通していくつかの注目すべき結果が示された。しかし、本研究の知見は回想法によって得られたものであり、この点は十分に議論される必要があるだろう。すなわち本研究では、過去体験を自発的に語るが大前提とされた。だが、自ら

の夫婦関係を調和的でないとする者にとって、長期にわたって形成された結婚生活の問題を吟味したり配偶者と討論することは、否定的な感情を生起する機会となる (Levenson et al., 1994)。したがって、夫婦人生の過去体験を回想することの意味は、高齢期での関係性の様態によってかなり異なるものと考えられる。

また高齢期はどの段階にもまして、配偶者に対して情緒的安定を求める傾向が高まるという (Reedy et al., 1981)。それならば、現在の穏やかで安定した状態を確保しようとして、否定的な記憶の回想を回避する場合も考えられる。こうした高齢期の心理的特性も、回想データを解釈する際には視野に入れる必要がある。

一方 Erikson (1986) は、縦断的研究から、若い頃に配偶者との結婚生活に不満を多くもらしていた者も、高齢期の回想ではより肯定的な記憶を語る傾向にあったと指摘している。これは合理化機制のためであると考えられる。今回調査した配偶者選択の意思決定に関しても、主体的な意思決定を行っていた者が全員関係性達成型ということであったが、この効果の存在は否定できない。したがって、面接で語られた体験とその意味づけが、どれほど当時の実相に迫っているかを明らかにするには、縦断的研究が不可欠といえよう。

第2節 高齢女性における配偶者との関係性と死別に対する準備性 —想定された死別場面での対応を通して— (研究4)

1. 目的

女性の平均寿命が男性に比べて長いことや、依然として男性が女性よりも年長の結婚が主流である今日、夫婦の死別場面は夫の死を妻が看取るパターンが圧倒的に多い。このような状況にあって、高

齢女性は、日常生活において配偶者との死別の問題をどのようにとらえ、それに対処しようとしているのであろうか。

これまで、高齢者の自分自身の死については、心理的適応研究において一つの重要な指標として取り扱われてきている (Molinari & Reichlin, 1985)。それに対して、心身ともに健全な者の死に対する意識を、夫婦関係の文脈の中で検討しようとする動きは、ほとんどみられなかったと考えられる。配偶者喪失のテーマは、必然的に実際に死別の移行期にある者や、喪失後の生活適応を要する者に関して論じられることが多く、自己と配偶者ともに死期が迫っていない者を対象とした実証的研究は皆無に等しい。しかしながら、死別への短期的・長期的適応の実証的研究から、死別後の適応に対する生前の夫婦関係の重要性が指摘されている (高橋, 1989; 河合, 1990; 岡村, 1992)。

そこで研究4では、高齢女性における配偶者との関係性ステータスと死別に対する基本的態度の関連性に着目することとした。もちろん、死別前の態度が実際の死別への対処の仕方をどれだけ予測するかを明らかにするには縦断的研究を要するが、本研究は配偶者喪失準備教育 (Deeken, 1995) や配偶者に先立たれた者への心理臨床的介入の方途に有益な示唆を提供できるものと考えられる。

自己と配偶者ともに心身が健康な者を対象に死別に対する態度を検討する際、視野に入れておかなければならないことは以下の点である。それは、自己と配偶者のうちどちらが先立つのか、すなわち自分が看取る側になるのかそれとも看取られる側になるのかはわからないという点である。どちらの場合にも遭遇する可能性があることから、両パターンを想定させた準備性を養っておくことが求めら

れる。そうすることで、例えば配偶者に先立たれても、喪失にともなう生活構造の変容に、より柔軟に適応することができると予想される。同様に自分が死にゆく側で立たされても、配偶者を残すことへの心残りや不安を抱くことが軽減され、安らかな死を迎えることに寄与すると考えられる。

ところで、死別に対する基本的態度を把握するには、以下の分析の視点が有効であると考えられる。すなわち、①自己と配偶者双方の死に対する意識、②夫婦における死の順序性とその背景的要因、③想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛けである。このうち視点①からは、個人内における、自己および配偶者の死の意味づけ方と、両者の関連性が把握できると考えられる。

一方、視点②からは、夫婦内での死ぬ順序という問いに対する基本的姿勢が明らかにされるものと考えられる。どちらかのパターン（「自分が先で配偶者が後」もしくは「配偶者が先で自分が後」）の記述に関しては、その選択を支えている要因の多様性も把握することができると考えられる。

最後の視点③からは、死別が別離の決定的局面であることから、そこでの言葉掛けを通して、夫婦人生の意味づけの度合いや受容状況が明らかになると考えられる。また、ある一定の順序パターンを示した者やどちらのパターンも選択しなかった者双方に、両方の死別パターンを想定させることで、死別の順序性に対する柔軟性を把握することが可能になると考えられる。死別は究極的な別離であることから、本研究を通して配偶者との絆の本質に迫ることができ、その意義は大きいと考えられる。

したがって、本研究の目的は、これら3つの要因が関係性ステイ

タスによって異なる特徴を示すかを検討することである。

2 方法

(1) 調査対象者

広島県在住で、自己あるいは配偶者のどちらか一方が少なくとも60歳以上か、結婚年数が30年以上の有配偶女性80名である。彼女らは研究2の女性対象者と同一である。したがって、ステイタスの分布は、関係性達成型23名(28.8%)、献身的関係性型7名(8.8%)、妥協的關係性型12名(15.0%)、関係性拡散型9名(11.3%)、表面的関係性型26名(32.5%)、独立的関係性型3名(3.8%)である。なお、独立的関係性型は3名と人数が少なかったため、一般的傾向の分析には含めるが、ステイタス間の比較では分析対象から除外することとした。

(2) 測定法

以下の内容からなる質問紙調査を実施した。

① 配偶者との関係性ステイタス

関係性ステイタスSCT12項目。

② 自己と配偶者双方の死に対する意識

SCT項目「私は自分の死に対して_____。」と「私は夫の死に対して_____。」での反応をもとに分析した。反応内容は、「死の意味に関する主体的探求」と「死の受容」という2つの観点に着目した。主体的探求のみられた者は、受容状況からさらに肯定的見解の「積極的受容型」、現在探求中の「模索型」、消極的受容の「あ

きらめ型」，否定的見解の「悲観型」に細区分された。一方，主体的探求の乏しい者は，問題の否認を示す「無自覚型」と死の意味について吟味する必要性を抱いていない「質的議論否定型」に分類した。評定基準と反応内容例は，表22に示すとおりである。

③夫婦における死の順序性とその背景的要因

SCT項目「私は自分と夫の死ぬ順序について_____。」と「なぜなら_____。」の反応内容をもとに分析した。順序選択の背景的要因は，表23-a), b)の評定基準にしたがって分類した。順序選択を明確に示した者は，まずその根拠に心情が含まれているか否か（「客観推測的要因」）に着目した。さらに心情を含む記述に関しては，その要因を内的なもの（「人格充足的・情愛的要因」）と，外的なもの（「機能的・規範的要因」）とに区分した。

「人格的・情愛的要因」とは，自己（配偶者）の情緒的充足における配偶者（自己）の重要性や，看取りたい看取られたいとする背景に情愛性による強い意志・願望（例えば，「自分はこの人に看取られたい」，「1年くらいあとに自分も死ねたらと思う」）を意味する。一方「機能的・規範的要因」には，配偶者（自己）が生活する上での自己（配偶者）の機能的役割（例えば，「配偶者にいなくなれると不便だから」，「自分なら一人で生きていける」）や規範・義務意識（例えば，「女が（夫を）介護すべきだから」，「社会の常識として」）などが含まれる。なお順序選択のみられない者は，「無自覚型」，「悲観型」，「模索型」，「質的議論否定型」に分類している。

④想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛け

SCT項目「私はこの世に残った夫に言葉を掛けるとすれば

表22 配偶者との死別に対する態度の評定マニュアル①
(自己と配偶者の死に対する基本的態度)

①「私は自分の死に対して、_____」
②「私は妻(夫)の死に対して、_____」

タイプ	分類基準	反応内容例
1.無自覚型	死について、これまで全く意識したことがないと思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・今のところ何も考えていない。 ・どういふことかわからない。 ・まだ先のこと。
2.悲観型	死を自分(達)の問題として認知しているが、受容はできていないと思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・不安でならないです。 ・いやです。 ・考えたくありません
3.模索型	死を自分(達)の問題として受け入れようと努めているあるいは、その意味を真剣に探求していると思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・現在検討中です。 ・人生の最終的な課題です。 ・真剣に向き合うつもりです。
4.あきらめ型	死を自分(達)の問題とみなし、受容もしているが、真剣に探求しようとする姿勢や積極的な意味付けのみられない記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・しかたのないことだと思う。 ・のがれることのできない運命だと思う。 ・命あるものには必ず死が訪れる。
5.質的議論否定型	そもそも死を議論することに価値を見いだしていない(問いの否定)、あるいは問いを受け入れていても望ましいとする死に方を淡々と示しているだけで、真剣な意味の探求がみられない記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・いつかは訪れると思う。 ・すべて神におまかせ。 ・できればポックリ死にたい。 ・ぼけずにさっとおわりたい。 ・周りから惜しまれるうちに死ぬのが理想。 ・考えても仕方がない。
6.積極的受容型	死を自分(達)の問題として認知し、主体的に関わっており、死に対する心構えができていると思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・いつ死んでも悔いはない。 ・恐ろしいとは思わない。素直に死んでいけると思う。 ・恐れを知らず安心して死を求めている。

表23 配偶者との死別に対する態度の評定マニュアル②
(夫婦における死の順序選択およびその根拠)

- ③「私は自分と妻(夫)の死ぬ順序に
に対して、_____」
④「なぜなら、_____」

※評定の前に…まずSCT③の記述内容を、「自分が先(1)」、「配偶者が先(2)」、「その他(3)」に分類する。



- ・SCT③で、明確な順序選択のあった者(1 or 2)は、SCT④の記述内容を下記の(a)明確な順序選択をした根拠によって評定する。
- ・SCT③で、明確な順序選択をしなかった者(3)は、SCT③の記述内容を下記の(b)明確な順序選択をしない根拠によって評定する。

(a)明確な順序選択をした根拠 (※SCT③で 1. or 2. を選択した者のみ)

タイプ	分類基準	反応内容例
1.人格的・情愛的要因	どちらの順序選択(残る側/去る側, 看取る側/看取られる側)であっても, 夫妻のどちらかあるいは両方の幸福感を視野に入れた内発的なものである。2人の関係的文脈以外の要因に支配されていない。	<p><自分が先の場合></p> <ul style="list-style-type: none"> ・夫がいるから自由に思い切ったことができるし, 気ままにさせてもらえた。 ・夫のいない生活は考えられない。 ・私がいてできなかったことを思う存分やってもらいたい。 <p><配偶者が先の場合></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が夫を看取ってあげたい。 ・一年くらい後に自分も死ねたらよい。 ・夫を一人残してはかわいそう。
2.機能的・規範的要因	生活(物理的側面)の不便さや, 規範的役割意識など, 2人の関係的文脈以外の要因によって選択された外発的なもの。	<ul style="list-style-type: none"> ・社会の常識として, 男が先。 ・経済力や社交性などから考えて妥当。 ・何となく世間一般をみて。 ・自分が残ると周りの者が困るから。 [※逆の場合も]
3.客観推測的要因	自己と配偶者が置かれた様々な現実状況を比較し, それに基づいて客観的に(希望的観測も含まれる)順序選択を行ったもの。	<ul style="list-style-type: none"> ・病気もち。 ・年齢からして自分が先だろう。 [※逆の場合も] ・平均寿命からいって男が先だろう。

(b)明確な順序選択をしない根拠 (※SCT③で3. を選択した者のみ)

タイプ	分類基準	反応内容例
1.無自覚型	夫婦での死ぬ順序について、これまで全く意識したことがないと思われる記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・考えたことがない。 ・わからない。
2.悲観型	夫婦で死の訪れる時期は異なると推測しながらも、どちらかが先に死ぬ(生き残る)という問題を直視できていない記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・できれば一緒にいきたい。 ・どちらが早くても嫌だ。 ・二人一緒ならいいのだけど。 ・考えないようにしている。 ・順序など考えたくない。
3.模索型	夫婦での死ぬ順序について、真剣に考える必要性を見出だし探求している、あるいは相手の意志や立場を思うあまり自分が望ましいとする順序選択の明示に抵抗を感じている記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・現在考え中。 ・どちらともいえない。 ・自分が先にいきたい気もするが、逆の思いもある。
4.質的議論否定型	そもそも死の順序性をを議論することに意味を見いだしていない(問いの否定)、あるいは問いを受け入れていても、死の順序にはこだわらないとする記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・考えてもしかたがない ・天の定め ・自然にまかせる ・こだわらない ・どちらでもよい ・順序など考えるのはナンセンス

表24 配偶者との死別に対する態度の評定マニュアル③
(死別場面での配偶者に対する言葉掛け)

- ⑤「私はこの世に残った妻(夫)に言葉を掛けるとすれば、_____」

⑥「私はこの世を去った妻(夫)に言葉を掛けるとすれば、_____」

タイプ	分類基準	反応内容例
1.過去の配偶者賞賛	過去の結婚生活、中でも配偶者が自分に対して行ってきたことに対して、労をねぎらったり、感謝の意を示した記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・お世話になりました。ありがとうございました。 ・色々ありがとう。心からお礼を言う。 ・長い間ご苦労様。感謝の気持ちで一杯です。
2.過去の自己反省	過去の結婚生活、中でも自分が配偶者に対してとってきた態度や自分の生き方全般を振り返り、反省や謝罪の意を表している記述。	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと優しくして接してあげれば良かった。 ・我儘ばかり言って申し訳なかった。 ・いたらない妻（夫）でしたね。許してね。
3.死別後の事象	死別後の、亡くなった配偶者あるいは残された配偶者を心配している記述や、安心感を与えたり勇気づけている記述など、配偶者のことを気づかう内容。	<ul style="list-style-type: none"> ・のびのび生きてください【※自分が先】。 ・私の分まで長生きしてください【※自分が先】。 ・子どもたちに迷惑を掛けしないで、元気に暮らしてください【※自分が先】。 ・私のことは心配しないでゆっくりお休みください【※配偶者が先】。 ・私の健康を守ってほしい【※配偶者が先】。
4.死別の否認	死を想定するという問い（場面設定）に対して否認を示す記述と、死の想定を受け入れたものの、配偶者との死別に直面し、その事実を否認しようとしている記述とが含まれる。	<ul style="list-style-type: none"> ・考えていません。 ・もう少し長生きしてもらいたかった。 【※逆の場合も】 ・一緒にいきたかった。
5.関係永続性	死別し存在する世界が異なっても、配偶者はずっと心の中に存在し続けるといった“連続的永続性”と、残された方が将来死ぬことで、先立った配偶者と再会できるとする“非連続的永続性”の記述が含まれる。	<ul style="list-style-type: none"> ・（死んでも）あなたといつも一緒です。 ・後からいくよ。 【※逆の場合も】 ・天国で待っていてね。 【※逆の場合も】

※要因が複数みられるケースもあり

例：「色々お世話になりありがとうございました。私の分まで長生きしてください。」 ←要因 1.と要因 3.が存在

__。」と「私はこの世を去った夫に言葉を掛けるとすれば_____。」に対する反応をもとに分析した。記述内容を吟味した結果、表24に示すように、「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」、「死別前の配偶者に対する自己のあり方の後悔や反省の記述」、「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」、「死別の想定あるいは（想定された）死別の事実を否認している記述」、「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」に分類された。なお、この項目では複数回答の場合があった。

死別に対する基本的態度の評定の信頼性は、3名の評定者の一致率によって検討した。その結果、2名以上が一致した割合は、関係性ステイタス93.9%、自己の死に対する態度96.7%、配偶者の死に対する態度98.3%、夫婦における死の順序100.0%、順序選択の根拠97.8%、残った配偶者への言葉掛け98.3%、去った配偶者への言葉掛け96.7%であった。

3. 結果および考察

(1) 自己と配偶者の死に対する意識

① 一般的傾向

まず、自己の死に対する態度は（表25）、最も多くを占めていたのは質的議論否定型であった（全体の約3割）。以下、積極的受容型（17.5%）、悲観型（16.3）と続いていた。一方、配偶者の死に対する態度では（表26）、自己のそれとは異なり質的議論否定型の割合が少なくなっており（20.0%）、様々なタイプに分散していた。

表 2 5 各ステイタスの、自己の死に対する基本的態度 ()内の数値の単位は%)

	全 体 (n=30)	関係性 達成型 (n=23)	表面的 関係性型 (n=26)	献身的 関係性型 (n= 7)	妥協的 関係性型 (n=12)	関係性 拡散型 (n= 9)
積極受容	14 (17. 5)	7 (30. 4)	3 (11. 5)	0 (0. 0)	3 (25. 0)	1 (11. 1)
無 自 覚	8 (10. 0)	3 (13. 0)	4 (15. 4)	1 (14. 3)	0 (0. 0)	0 (0. 0)
悲 観	13 (16. 2)	2 (8. 7)	6 (23. 1)	1 (14. 3)	2 (16. 7)	1 (11. 1)
模 索	6 (7. 5)	1 (4. 4)	1 (3. 9)	2 (28. 6)	2 (16. 7)	0 (0. 0)
あきらめ	7 (8. 8)	2 (8. 7)	3 (11. 5)	1 (14. 3)	0 (0. 0)	0 (0. 0)
議論否定	26 (32. 5)	7 (30. 4)	7 (26. 9)	2 (28. 6)	3 (25. 0)	6 (66. 7)
無 回 答	6 (7. 5)	1 (4. 4)	2 (7. 7)	0 (0. 0)	2 (16. 7)	1 (11. 1)

表26 各ステータスの、配偶者の死に対する基本的態度 (()内の数値の単位は%)

	全 体 (n=80)	関係性 達成型 (n=23)	表面的 関係性型 (n=26)	献身的 関係性型 (n= 7)	妥協的 関係性型 (n=12)	関係性 拡散型 (n= 9)
積極受容	12 (15.0)	6 (26.1)	1 (3.9)	1 (14.3)	2 (16.7)	2 (22.2)
無自覚	13 (16.2)	5 (21.7)	5 (19.2)	1 (14.3)	1 (8.3)	0 (0.0)
悲観	17 (21.3)	5 (21.7)	8 (30.8)	2 (28.6)	1 (8.3)	0 (0.0)
模索	6 (7.5)	4 (17.4)	1 (3.9)	0 (0.0)	1 (8.3)	0 (0.0)
あきらめ	9 (11.3)	2 (8.7)	3 (11.5)	2 (28.6)	1 (8.3)	0 (0.0)
議論否定	16 (20.0)	0 (0.0)	5 (19.2)	1 (14.3)	4 (33.4)	6 (66.7)
無回答	7 (8.7)	1 (4.4)	3 (11.5)	0 (0.0)	2 (16.7)	1 (11.1)

ここで、これらの反応内容を死を受容できているか否かという視点から、自己と配偶者の死に対する態度の組み合わせに着目した。なお、本分析で非受容的記述としたのは、これまでの人生で死の問題を積極的に考えることのなかった「無自覚型」と、突然に死の宣告を受けた場合、不適応の様態を示すことが予想される「悲観型」である。検討した結果、どちらの死に対しても非受容的記述を示さなかった者はその他のタイプよりも多く、これだけで全体の半数近くを占めていた（表27）。

自己の死に対しては、全体の半数近くが積極的受容型もしくは質的議論否定型に該当しており、比較的自然体で受けとめようとする姿勢がうかがわれる。対照的に、配偶者の死に対しては個人差が大きかったが、その中で無自覚型と悲観型の割合をみると、自己の死のそれを1割ほど上回り、両者だけで全体の3分の1に及んでいた。このことから、配偶者の死は自分の死に比べて、実際に死期が迫ったとき、現実のものとして受け入れるのがより困難であると推察される。その一方で、自己と配偶者の死に対する態度の組み合わせでは、対象者の約半数が「ともに非受容的記述なし」であったことから、自己の死と配偶者の死それぞれの態度には、ある程度一貫性があると考えられる。

② ステイタス間の比較

自己の死に対する態度では（表25）、関係性達成型は死に対して動じないタイプ（積極的受容型と質的議論否定型）だけで6割を占めていた。特に、積極的受容型の割合は他のあらゆるステイタスよりも多くみられた（30.4%）。妥協的關係性型もこの二つで半数を、また表面的關係性型は質的議論否定型と悲観型だけで半数を占めて

表 2 7 各ステイタスの、自己と配偶者の死に対する基本的態度の組合せ () 内の数値の単位は%)

	全 体 (n=80)	関係性 達成型 (n=23)	表面的 関係性型 (n=26)	献身的 関係性型 (n= 7)	妥協的 関係性型 (n=12)	関係性 拡散型 (n= 9)
ともに非受容 的記述あり	37 (46. 3)	10 (43. 5)	9 (34. 6)	3 (42. 8)	7 (58. 4)	7 (77. 8)
自己の死のみ 非受容的記述あり	6 (7. 5)	2 (8. 7)	1 (3. 9)	1 (14. 3)	1 (8. 3)	1 (11. 1)
配偶者の死のみ 非受容的記述あり	17 (21. 3)	7 (30. 4)	6 (23. 1)	2 (28. 6)	1 (8. 3)	0 (0. 0)
ともに非受容 的記述あり	13 (16. 2)	3 (13. 0)	7 (26. 9)	1 (14. 3)	1 (8. 3)	0 (0. 0)
無 回 答	7 (8. 7)	1 (4. 4)	3 (11. 5)	0 (0. 0)	2 (16. 7)	1 (11. 1)

注) ここでは無自覚型と悲観型の反応内容を非受容的記述としている。

いた。関係性拡散型は質的議論否定型に6割以上の者が該当し、献身的関係性型は様々なタイプに分散していた。

配偶者の死に対しては(表26)、関係性達成型で最も多くみられたのは積極的受容型(26.1%)であった。次に無自覚型と悲観型がそれぞれ21.7%で続いていた。一方、表面的関係性型では、悲観型(30.8%)が最も多くみられた。以下、無自覚型と質的議論否定型が19.2%で並んでいた。献身的関係性型では、悲観型とあきらめ型がそれぞれ3割弱みられた。妥協的關係性型では積極的受容型と質的議論否定型で半数を占め、また関係性拡散型では記述したすべての者がこの2つのタイプのいずれかに属していた。

続いて態度の組合せに着目したところ(表27)、関係性達成型では「ともに非受容的記述なし」の者が最も多く、全体の4割を占めていた。次に「配偶者の死のみ非受容的記述あり」が続いていた(30.4%)。表面的関係性型は「ともに非受容的記述なし」の者が最も多く(34.6%)、続いて多かったのは「ともに非受容的記述あり」であった(26.9%)。献身的関係性型、妥協的關係性型、関係性拡散型も、最も多く分布していたのは「ともに非受容的記述なし」であった(それぞれ42.9%、58.3%、77.8%)。特に関係性拡散型の分布の偏りが顕著である。

関係性達成型は、他のステイタスに比べ配偶者の死に対して積極的受容型の割合が高く示されたが、一方で無自覚型や悲観型もそれぞれ2割程度みられた。このことは、配偶者の存在の人格的意味づけがたとえ達成できていても、そのことが即配偶者の死の積極的な受容を予測するわけではないことが推察される。むしろ、関係性達成型にみられた無自覚型と悲観型の記述は、人格的意味づけを確立

した今だからこそ、死の問題を棚上げしたいという気持ちが反映されているとも考えられる。この結果は、関係性の成熟と死の受容の問題は慎重に論じられる必要があることを示唆しているといえる。

ところで、関係性達成型には、模索型の者が17.4%存在していたことと、質的議論否定型が一人もみられなかったことも重要な知見である。関係性達成型にとって、死の問題を吟味することは苦痛のともなうことでありながら、どのステイタスよりもそのことを真剣に考えようとしていることが推察される。

それに対し、人格的な関係性を必要と認知しながらも、十分に確立できていないステイタス（妥協的關係性型、関係性拡散型）ほど、配偶者の死に対して非受容的記述が少なかった点も注目に値する。特に、関係性拡散型は自己と配偶者の死に対する態度の組合せにおいて、8割近くの者がどちらの死に対しても非受容的な記述を示していなかった。

この結果を安易に喜ぶことは危険であろう。関係性達成型と関係性拡散型とでは、そもそも配偶者の存在意味が大きく異なり、関係性拡散型はその存在に対し否定的見解を抱きながら現実生活を生きている。関係性拡散型は、研究1で自己と配偶者の人生評価が低いことが、また研究2では主観的幸福感の低さが確認された。したがって、関係性拡散型の死を受け入れようとする背景には、生きることに見出だせない、あるいは現実生活から逃避したいという思いが込められている可能性がある。

彼女らは、実際の死別後の生活においても、不適応性が懸念される。結婚生活が円満でないということで、死別への適応は一見容易にみえるかもしれない。しかし、配偶者を生前憎んでいた者ほど、

より強い罪悪感に悩まされる傾向にあるという報告がある（河合，1990）。関係性拡散型にみられた結果は，配偶者との関係性を修正する必要性を示唆していると理解すべきであろう。

関係性達成型と同様に，配偶者の存在あるいは結婚生活を肯定的に意味づけている点で共通している表面的関係性型も，実際の死別場面において不適応に陥る可能性が高いと考えられる。なぜなら，配偶者の存在の人格的意味づけには，まず配偶者を自分とは異なる他者であるという事実をしっかりと受けとめることが求められる。自己と配偶者との明確な境界が確立していない状態のまま，配偶者を肯定的にとらえている表面的関係性型にとって，配偶者の死別はとりわけ悲劇的であるかもしれないからである。

(2) 夫婦における死の順序性とその背景的要因

① 一般的傾向

まず順序選択であるが，対象者は「配偶者が先」とする者が，6割を超えていた（表28）。つづいて順序の根拠であるが，これはいずれかの順序選択（「自分が先で配偶者は後」もしくは「配偶者が先で自分は後」）を行った者のみを対象としている。分析の結果，一般的傾向として内的要因すなわち人格的・情愛的要因をその根拠として挙げている者が多かった（53.8%）。病気や年齢差といった客観推測的要因を挙げる者は，1割に満たなかった。

対象者は「配偶者が先で自分は後」とした者が多く，彼女らの大部分はその根拠として内的要因であれ外的要因であれ，自分が看取るためということを挙げている。このことは，女性が死別の問題を議論する場合，自分が残されたとき（介護期以降の人生）の辛さや

表 2 8 各ステイタスの，夫婦内の死の順序選択・順序根拠（（）内の数値の単位は％）

	全 体 (n=80)	関係性 達成型 (n=23)	表面的 関係性型 (n=26)	献身的 関係性型 (n= 7)	妥協的 関係性型 (n=12)	関係性 拡散型 (n= 9)
死の順序選択						
自分が先	13 (16. 2)	4 (17. 4)	4 (15. 4)	1 (14. 3)	1 (8. 3)	2 (22. 2)
配偶者が先	52 (65. 0)	16 (69. 6)	15 (57. 7)	5 (71. 4)	10 (83. 4)	5 (55. 6)
選択せず	13 (16. 3)	3 (13. 0)	6 (23. 1)	1 (14. 3)	1 (8. 3)	1 (11. 1)
不 明	2 (2. 5)	0 (0. 0)	1 (3. 8)	0 (0. 0)	0 (0. 0)	1 (11. 1)
死の順序根拠						
情愛的要因	35 (53. 8)	16 (80. 0)	10 (52. 6)	3 (50. 0)	4 (36. 4)	1 (14. 3)
規範的要因	25 (38. 5)	2 (10. 0)	8 (42. 1)	3 (50. 0)	6 (54. 5)	5 (71. 4)
客観的要因	5 (7. 7)	2 (10. 0)	1 (5. 3)	0 (0. 0)	1 (9. 1)	1 (14. 3)

注) 死の順序根拠については，順序選択でどちらかの選択（自分が先もしくは配偶者が先）をした者の占める割合（％）を示している。

不安を抱くより前に、看取り（介護期）のテーマの方が切実な問題として受けとめていることが推察される。

② ステイタス間の比較

死の順序選択では（表28），いずれのステイタスも配偶者が先というパターンを選択する者が多くみられたが，その傾向が最も強かったのは，妥協的關係性型である（83.3%）。対照的に，表面的關係性型と關係性拡散型は，他のステイタスに比べてあまり多くない（それぞれ57.7%，55.5%）。この他に表面的關係性型に，明確な選択をしない者が比較的にみられたことは注目に値する（23.1%）。その内訳は，質的議論否定型3名，無自覚型2名，模索型1名である。この傾向も，先に示された表面的關係性型の特徴が反映されていると考えられる。

ところで，表面的關係性型と關係性拡散型では，配偶者が先とする死の順序パターンが相対的に少ないと指摘したが，そうした順序パターンの根拠に着目したところ（表28），表面的關係性型では内的要因（人格的・情愛的要因）が半数みられたのに対し，關係性拡散型ではいずれかの順序を示した7名の内わずか1名（14.3%）しかみられなかった。また自分が後を選択した割合が最も高かった妥協的關係性型も，内的要因を示す者は36.4%と，過半数に満たなかった。死の順序の根拠に，内的要因の占める割合が最も高かったのは關係性達成型で80.0%を占め，他のステイタスとの差が著しい。

配偶者の死に対する記述をふまえると，關係性達成型は配偶者の死に対して不安を抱いたり否認を示しながらも，内的な要因によって，自分が後とする死の順序性を主体的に希望していると推察される。先の一般的傾向において，女性が死別の問題を議論する場合，

自分が残されたときの辛さや不安を抱くより前に、看取りのテーマの方が切実な問題として受けとめているかもしれないとの指摘をした。この分析から、同じ看取りのテーマを女性が有していても、その意志を支える背景要因はステイタスにより異なることが示唆された。

(3) 想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛け

① 一般的傾向

残った配偶者に対しての言葉掛けは（表29）、「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」が最も多く（53.8%）、「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」がそれに続いていた（35.0%）。一方、去った配偶者に対しての言葉掛けでは、「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」に最も多く分布していた（42.5%）。次に多く見られたのは、「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」であった（36.3%）。

残った配偶者に対しての言葉掛けでは、表29に示すとおり死別後の事象を挙げる傾向が高かった。これは、一人残す夫のことが気掛かりであることを示していると考えられる。逆に去った配偶者への言葉掛けでは、死別後の事象よりも、過去に配偶者が自分にしてくれたことへの賞賛が上回っていた。自分が先立つ場合とは異なり、夫の生活を心配する必要がないため、過去をふりかえることが可能になっているのかもしれない。

② ステイタス間の比較

表 2 9 各ステータスの、想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛け（()内の数値の単位は%）

	全 体 (n=80)	関係性 達成型 (n=23)	表面的 関係性型 (n=26)	献身的 関係性型 (n= 7)	妥協的 関係性型 (n=12)	関係性 拡散型 (n= 9)
<u>残った配偶者への言葉掛け</u>						
過去の配偶者	28 (35.0)	13 (56.5)	9 (34.6)	3 (42.9)	2 (16.7)	1 (11.1)
過去の自己	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
死別後の事象	43 (53.8)	7 (30.4)	15 (57.7)	6 (85.7)	7 (58.3)	6 (66.7)
死別の否認	3 (3.8)	1 (4.3)	1 (3.8)	0 (0.0)	1 (8.3)	0 (0.0)
関係永続性	7 (8.8)	3 (13.0)	2 (7.7)	1 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
そ の 他	9 (11.3)	1 (4.3)	2 (7.7)	0 (0.0)	3 (25.0)	3 (33.3)
<u>去った配偶者への言葉掛け</u>						
過去の配偶者	34 (42.5)	11 (47.8)	12 (46.2)	3 (42.9)	4 (33.3)	3 (33.3)
過去の自己	3 (3.8)	1 (4.3)	2 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
死別後の事象	29 (36.3)	6 (26.1)	9 (34.6)	4 (57.1)	4 (33.3)	5 (55.6)
死別の否認	8 (10.0)	2 (8.7)	3 (11.5)	0 (0.0)	2 (16.7)	0 (0.0)
関係永続性	10 (12.5)	6 (26.1)	2 (7.7)	1 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
そ の 他	7 (8.8)	2 (8.7)	2 (7.7)	0 (0.0)	2 (16.7)	1 (11.1)

注) 複数回答がみられたため、割合の総計は100%を超える。

残った配偶者に対しては（表29），関係性達成型を除くすべてのステイタスで，「死別により逢えない（逢えなくなった）配偶者を安心させるあるいは支援する姿勢がうかがわれる記述」が最も多くみられた。それに対し，関係性達成型は「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が最も多くみられ，この記述だけで過半数を占めていた（56.5%）。一方，去った配偶者に対しては（表29），配偶者の存在を肯定的に意味づけているステイタスでは，「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が，最も多い記述内容であった（それぞれ関係性達成型：47.8%，表面的関係性型：46.2%）。その他の注目すべき点として，関係性達成型の4人に1人が「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」をしていることが挙げられる。

ここで，想定された両場面への反応を照らし合わせて総括すると，いかなるステイタスも，死別という究極的な別離にいたっては，否定的な言葉掛けをする者はほとんどみられなかった。ただし，関係性が十分でない者が穏やかな別れを実現させるためには，これまでの夫婦人生の問い直しは避けなければならないのかもしれない。それは，否定的感情を再び経験することになるからである。「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が，妥協的關係性型と関係性拡散型に少ない要因には，そもそもそうした肯定的な記憶がないだけでなく，過去を振り返ろうとしない防衛機制が働き，未来への記述を志向するようになるのではないかと推察される。

対照的に，関係性達成型では，どちらの想定場面においても「過去の配偶者に対する感謝や賞賛を示す記述」が多くみられた。この

ことは、高齢期に人格的な関係性を有する者は、死別が究極的な別離だからこそ、あえて積極的に過去を振り返り、もう一度それを意味づける傾向があるのかもしれない。また関係性達成型の中には、「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」も何人かにみられた。このことから、過去の夫婦人生を再吟味するプロセスには、配偶者との関係性を永続的なものへと内在化することを含み、そのプロセスを通して関係性を統合させる場合があると考えられる。

第4章 高齢期における配偶者との関係性と性役割の検討

－平等主義的性役割志向性と家事労働の分担－

(研究5)

1. 目的

時代の流れとともに、性別役割分業とそれにもとづく分業体制は変化の兆しをみせはじめている。しかし、その変化は一様ではない。基本属性による顕著な差が確認されており、世代では若年層より老年層に、性別では女性より男性の方が性役割に関する固定観念が強い(厚生省, 1998)。こうした状況は、長年にわたり経済的自立や職業的達成を阻害されてきた女性ばかりでなく、それを支持する傾向にあった男性にとっても深刻な事態をもたらしている。

渡邊(1995)は、対人関係能力と生活身辺的能力の観点から、男性が十分に自立した存在ではないと指摘しているが、この問題がとくに深刻化するのは定年退職後と考えられる。前者の対人関係能力については、高齢期の友人関係やソーシャル・サポートの研究が行なわれ、渡邊の指摘が実証的に裏付けられている(例えば、前田, 1988; 玉野ら, 1989; 岡村, 1991)。例えば、一緒にいて楽しい相手として、女性は多様な対象を挙げているのに対し、男性の場合配偶者に集中する傾向が示されている(東京都情報連絡室, 1994)。女性の方が豊かな対人ネットワークを形成している。後者の生活身辺能力(家事など)の欠如も手伝って、高齢期を妻に大きく依存する男性も決して少なくない。

男性の家事労働への関与を規定する要因に関しては、有職者の場

合、有給労働時間の長さ、性役割（ジェンダー）観、生活技術の有無などが指摘されている（堀内ら、1997）。このように、男性の側に生活身辺能力が十分に形成されなかった背景には、国家や企業の構造的体質の問題があることに目を向ける必要がある。しかし、性役割観のように、個々人の意識のありよう（価値観、規範、信念など）が強く関与していることもまた事実である。柔軟な性役割に対する態度と、生活身辺能力の価値を認識できれば、高齢期においてもその習得は十分期待できる。男女双方にとって、男らしさや女らしさにこだわらない両性性的な生き方、すなわち調和的な自立がサクセスフル・エイジングにとって重要と考えられる（Reynolds et al., 1995）。

研究4から、高齢女性の多くは、死の順序性について夫が先立つ方が望ましいと考えていることが明らかとなった。また、自分が先立つパターンを想定させた死別場面の言葉掛けからは、夫が一人残ることで生じる日常生活の問題を懸念する記述が目立った。この種の不安は、夫の生活身辺能力の向上によって概ね解消されるものと考えられる。だが、高齢女性の中には、伝統的な性役割を支持する動きがある。それは、これまで自分の存在を支えてきた拠り所であり、性別役割分業の否定は今までの自分の生き方そのものを否定することにつながるからなのだろうか。

以上をふまえ、研究5では配偶者との関係性と性役割との関連性を問題とする。とくに本研究では、結婚生活の肯定的意味づけを支える要因によって、性役割への態度に質的な相違がみられるかに注目したい。これまでにも強調してきたように、関係性ステータスの観点からとらえると、肯定的意味づけを支える要因には二つの次元

が想定される。その一つは、関係性達成型の特徴，すなわち結婚生活の継続において配偶者が自分とは異なる他者であることを自覚し，絶えずその存在をかけがえのないものとして意味づけている「人格的肯定」である。

もう一つは，表面的関係性型の「機能的肯定」である。この次元は，自己と配偶者との境界が不明瞭でその存在を人格レベルから意味づけるという視点が乏しく，肯定的評価の拠り所が結婚生活の継続で得られる機能的メリットにとどまっている点が特徴である。本研究の目的は，これら二つの次元が，性役割に対する態度とどのような関連にあるか検討することである。性役割に対する態度の指標には，理念として夫妻双方の平等的志向性を，また実践的態度として夫の家事労働への関与を取り上げることとした。加えて，妻による夫の関与に対する評価（満足度）も比較検討した。

2 方法

(1) 調査対象者

自己もしくは配偶者の少なくとも一方が60歳以上か，結婚年数が30年以上の有配偶者82名41組。対象者の平均年齢は，男性67.4歳（ $SD=5.22$ ），女性63.2歳（ $SD=5.28$ ）であった。年齢の幅は54歳から80歳で，そのうち60代が全体の63.4%を占めていた。なお，研究1から研究4までのいずれの対象者とも異なる。

(2) 測定法

① 配偶者の存在に対する人格的肯定と機能的肯定の有無

夫妻ともに，関係性ステイタスSCT（12項目）を実施し，それ

に対する反応内容をもとに分類した。すなわち、「人格的肯定」の有無の基準は関係性達成型であるか否かで、一方「機能的肯定」は表面的関係性型か否かによる。なお評定の信頼性は、3名の評定者の一致率によって検討した。3名中（うち一名は筆者）2名以上が一致した割合は、90.2%であった。

②性役割に対する平等主義的態度（資料3参照）

夫妻ともに、鈴木（1994）の平等主義的性役割態度スケール短縮版15項目を実施した（例えば、「子育ては女性にとって一番大切なキャリアである（逆転項目）。」、「主婦が働くと夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびが入りやすい（逆転項目）。」）。4件法による。男女別に全項目について因子分析し、男性で1項目、女性で2項目が因子負荷量が低かったため削除されたが、いずれも1因子構造であることが確認された。

③夫の家事労働への関与度（資料4参照）

下坂・下村（1996）の「男性の家事行動に対する余暇としての意識」調査で用いたカテゴリーを高年齢期にあわせて短縮したものを、夫に対し実施した。4件法11領域である（例えば、「買物」、「料理」、「洗濯」）。選択肢は先行研究に従い、「週1回以上」、「月1回から3回程度」、「年に数回程度」、「まったくしない」とし、得点化はそれぞれ順に4点、3点、2点、1点を与えた。全11項目について因子分析したところ、1因子構造であることが確認された。なお、因子負荷量の低さから3項目が削除された。

④妻による夫の家事労働への関与に対する満足度

③の各領域の遂行状況に関して、妻の満足度を尋ねた（4件法）。全11項目について因子分析した結果、1因子構造が確認された。

(3) 手続き

1998年5月～6月にかけて、広島県内の高齢者大学受講者とその配偶者を対象に実施した。配布および回収の方法は、研究1および研究2と同じである。

3. 結果

(1) 夫の肯定的意味づけと夫妻の性役割態度

はじめに夫の肯定的意味づけと、自己およびその配偶者の性役割態度の関連性について検討した。その結果、表30に示すように夫が「人格的肯定」を有するか否かによって、夫自身の家事労働への関与度と、それに対する妻の満足度に差異が認められた。すなわち、「人格的肯定」を有する夫は、そうでない夫に比べて家事労働に多く関与し、妻の評価も高かった。それに対し、夫の「機能的肯定」による分析では、夫自身の家事労働への関与度のみ有意差が確認され、「機能的肯定」を有する夫の関与度は低かった。

(2) 妻の肯定的意味づけと夫妻の性役割態度

一方、妻の肯定的意味づけと、自己およびその配偶者の性役割態度の関連性の分析では、表31に示す結果が得られた。「人格的肯定」を有する妻は、そうでない妻に比べて夫の家事労働への関与を有意に高く評価していた。妻が「機能的肯定」を有するか否かという基準では、夫妻の性役割態度のいずれの変数においても、明確な差異はみられなかった。

表 3 0 夫の人格的肯定および機能的肯定の有無別にみた夫妻の平等主義的志向性と夫の家事労働への関与度およびそれに対する妻の満足度

	夫の妻に対する人格的肯定			夫の妻に対する機能的肯定		
	有 (n=18)	無 (n=23)	t値	有 (n=17)	無 (n=24)	t値
夫の平等主義	36.64 (12.20)	34.70 (10.70)	0.53	33.97 (11.05)	36.65 (11.56)	-0.73
夫の家事関与	22.72 (4.61)	18.95 (5.79)	2.24*	18.13 (6.00)	22.33 (4.64)	-2.50*
妻の平等主義	36.22 (10.48)	33.13 (7.82)	1.08	33.76 (7.87)	35.00 (10.01)	-0.42
妻の家事満足	33.97 (5.31)	29.48 (5.53)	2.58*	29.82 (5.85)	32.89 (5.56)	-1.67

* $p < .05$

注) 得点(カッコ内はSD)を示す。

表 3 1 妻の人格的肯定および機能的肯定の有無別にみた夫妻の平等主義的志向性と夫の家事労働への関与度およびそれに対する妻の満足度

	妻の夫に対する人格的肯定			妻の夫に対する機能的肯定		
	有 (n=22)	無 (n=19)	t値	有 (n=10)	無 (n=31)	t値
夫の平等主義	37.48 (10.85)	33.25 (11.69)	1.18	35.80 (14.17)	35.50 (10.45)	0.07
夫の家事関与	20.77 (5.72)	20.50 (5.51)	0.15	19.60 (4.62)	21.00 (5.87)	-0.69
妻の平等主義	34.91 (10.84)	34.00 (6.80)	0.32	32.05 (6.64)	35.27 (9.72)	-0.97
妻の家事満足	33.55 (4.53)	29.22 (6.39)	2.46*	31.00 (6.04)	31.74 (5.84)	-0.34

* $p < .05$

注) 得点 (カッコ内はSD) を示す。

(3) 肯定的意味づけによる夫婦類型と夫妻の性役割態度

次に、夫妻の肯定的意味づけの有無から夫婦類型を設定し、比較検討した。まず「人格的肯定」の基準による夫婦類型の分析結果は、表32に示すとおりである。夫の家事労働への関与度、妻の平等主義的志向性および夫の家事労働への関与に対する満足度で、主効果が確認された。Tukey法による多重比較の結果、夫の家事労働への関与度は「夫妻ともに人格的肯定有の夫婦」で最も高く、「妻のみ人格的肯定有の夫婦」との差が有意であった。また妻の平等主義的志向性と夫の家事労働への関与に対する満足度でも「夫妻ともに人格的肯定有の夫婦」が最も高く、平等主義的志向性で「夫のみ人格的肯定有の夫婦」と「妻のみ人格的肯定有の夫婦」、夫の家事労働への関与に対する満足度で「夫妻ともに人格的肯定無の夫婦」との差がそれぞれ有意であった。

続いて、夫妻が「機能的肯定」を有するか否かという基準により検討した。その結果、主効果が認められたのは夫の家事労働への関与度だけであった（表33）。多重比較を行なったところ、「夫妻ともに機能的肯定無の夫婦」が「夫のみ機能的肯定有の夫婦」よりも有意に高得点であった。

4. 考察

研究5では、配偶者の存在に対する「人格的肯定」と「機能的肯定」の有無が、性役割に対する態度とどのような関連にあるか検討した。分析の結果、性役割に対する態度と密接な関連にあるのは「人格的肯定」の次元であることが明らかとなった。このことは、関係性の発達によって、性役割に対する態度が柔軟になることを示唆

表32 人格的肯定の有無による夫婦類型にみた夫妻の平等主義的志向性と夫の家事労働への関与度およびそれに対する妻の満足度

	人 格 的 肯 定				F値	多重比較
	(a) 夫妻とも有 (n=12)	(b) 夫のみ有 (n= 6)	(c) 妻のみ有 (n=10)	(d) 夫妻とも無 (n=13)		
夫の平等主義	37.04 (11.60)	35.83 (14.47)	38.00 (10.49)	31.96 (10.52)	0.61	
夫の家事関与	23.92 (4.48)	20.33 (4.23)	17.00 (4.78)	20.58 (6.23)	3.33*	(a)>(c)
妻の平等主義	39.88 (10.72)	28.92 (4.98)	28.95 (7.85)	36.35 (6.34)	4.51**	(a)>(b)・(c)
妻の家事満足	35.21 (3.64)	31.50 (7.48)	31.33 (4.85)	28.08 (5.79)	3.63*	(a)>(d)

* $p < .05$ ** $p < .01$

注) 得点(カッコ内はSD)を示す。

表33 機能的肯定の有無による夫婦類型にみた夫妻の平等主義的志向性と夫の家事労働への関与度およびそれに対する妻の満足度

	機能的肯定				F値	多重比較
	(a) 夫妻ともに有 (n=5)	(b) 夫のみ有 (n=12)	(c) 妻のみ有 (n=5)	(d) 夫妻ともに無 (n=19)		
夫の平等主義	34.40 (14.12)	37.77 (10.16)	37.20 (15.74)	36.50 (10.76)	0.18	
夫の家事関与	20.40 (6.47)	17.09 (5.79)	18.80 (2.17)	23.26 (4.70)	3.74*	(d) > (b)
妻の平等主義	35.80 (5.97)	32.92 (8.63)	28.30 (5.31)	36.76 (10.30)	1.36	
妻の家事満足	30.80 (3.56)	29.42 (6.68)	31.20 (8.32)	33.38 (4.70)	1.15	

* $p < .05$

注) 得点(カッコ内はSD)を示す。

している。それに対し、「機能的肯定」はそれを有すること自体、性役割志向性や家事労働のあり方を予測するものではなかった。

ところで、高橋（1991）は、我が国の高齢期夫婦が円満であるための条件について、「夫の場合、平等的な意識をもつことが夫婦の満足度を高めるが、妻の場合は「一步下がる控えめさ（不平等意識）」をもつことが夫婦の満足度を高めているかもしれない」と指摘している。このように、本研究の対象となった女性は、その世代の特徴として、イエ制度にもとづいた主従的な縦関係を前提とし、夫に家事の協力を求める傾向は低いことが考えられる。

しかしながら、本研究から夫と妻がともに「人格的肯定」を有する夫婦では、他の夫婦に比べて性役割にとらわれないパートナーシップが形成されていることが示唆された。つまり、配偶者との相互性にもとづいた対等な関係性（「夫妻ともに人格的肯定あり」）を構築することによって、そうした性役割の固定観念が強かった時代を生きてきた女性であっても、平等主義的な性役割態度を有することは可能であると考えられる。

また、夫の家事労働への関与度において、「夫妻ともに人格的肯定有の夫婦」は「妻のみ人格的肯定有の夫婦」よりも有意に高得点を示した。したがって、これまでの権威構造にみられた、妻が夫を一方向的に尊敬するだけの関係とは異なり、夫妻が互いを人格レベルから尊重しあう関係になると、夫が家事労働への関与に前向きな姿勢をもつことが考えられる。

このように、高齢期の結婚生活で性役割の問題がどのように取り扱われるかは、夫の関係性に大きく規定されているのかもしれない。夫の妻に対する「人格的肯定」と自身の生活身辺能力との間に密接

なつながりが示唆されたことから、配偶者に先立たれるという、男性からして予期せぬ事態が起きた場合、その危機対応のあり方も関係性の発達レベルによって異なることが予想される。

第5章 全体的考察

第1節 本研究から得られた知見とその成果

1. 関係性ステータスの有効性

本研究の第一の目的は、配偶者との関係性の主体的側面を検討する枠組みとして考案された関係性ステータスの測定法を構成し、妥当性を検討することであった。この点は、研究1の結婚満足感および夫婦人生の受容状況との関連から検討され、構成概念妥当性が確認された。また、研究2～研究5で取り上げた諸変数とステータスの関連性の分析結果も、図1に示した発達経路の多様性によって概ね説明することができた。したがって、配偶者との関係性の主体的側面を検討する上で、日常生活での「関与の積極さ」と配偶者に対する「存在の人格的意味づけ」の二つの基準の有効性が示唆されたと考えられる。

とくに、この二つの基準から設定された関係性ステータスによって、結婚生活への適応を人格的意味づけに根ざしたもの（関係性達成型）と機能的要因にとどまっているもの（表面的関係性型）とに分類し、相互性の分析を中心に両者の質的な相違を実証的に検証できたことは大きな成果と考えられる。本研究の結果は、結婚生活の継続を望むかぎり、互いの人格を尊重した関わりとは何かを常に問い続ける姿勢が不可欠なことを示唆している。婚姻関係がたとえ永續性の観念によって守られたつながりであるとしても、自分にとっての相手の存在意味を日常生活の中で見失ってはならないと考えられる。

2 関係性ステイタスからみた我が国の高齢期夫婦像

本研究の第二の目的は、各ステイタスを比較検討し、我が国の配偶者との関係性の特質を明らかにすることであった。まず注目すべき結果は、本研究の対象者がイエ制度規範の色彩強い時代に結婚していたにもかかわらず、高齢期に関係性達成型になっていた者が比較的多く確認されたことである。彼らは自己のみならず配偶者も関係性達成型の確率が高かったことから（研究1）、長い結婚生活を通じて相互に関与し合う中で、主体的な関係性を獲得していったものと考えられる。これは我が国の結婚生活が概ね良好とする先行研究の知見（例えば、高橋，1991；河合，1992）を裏付ける結果といえる。

一方でそれらの研究からは、男性の得点が女性のそれを上回る傾向も共通して確認されている。本研究の結果は、この点についても先行研究を支持している。すなわち、結婚生活に適応している（その要因はどうあれ、配偶者を肯定的に意味づけている）か否かという基準でみると、適応的なステイタスは関係性達成型と表面的関係性型である。男性はこの二つのステイタスに集中し、結婚生活を好意的に受けとめている者が大多数を占めていた。それに対し、女性は男性に比べて個人差が大きく、適応的でないステイタス（献身的関係性型、関係性拡散型）も少数ではあるが確認された。これまでの研究において、女性の平均値が低く示された背景には、彼女らの中にそうした人格的意味づけを必要としている（していた）にもかかわらず、十分に実現できていない者が含まれていることが関与していると考えられる。

このような男女間の相違は何に起因しているのでしょうか。長い間女性（特に専業主婦）にとって家庭は私的領域ではなく、とくに夫の前では妻役割を期待され、やすらぎを感じにくい場であった。夫が定年により夫役割から解放されるのに対し、家事が妻役割であり続けるかぎり、妻だけは半永久的に遂行が期待される。定年後も分業体制が壊れず、過剰な負担が自分だけに重くのしかかる状況にあって、夫が自分を機能レベルすなわち道具としてしか扱ってくれていないと認知した場合（たとえ自分の存在を好意的に評価していても）、人格レベルで尊重しあう結びつきを期待する妻にとっては深刻な状況であろう。

ある調査から、中高年女性の配偶者志向の低さが指摘されている（東京都情報連絡室，1994）。ここでいう配偶者志向とは、これからの人生を充実させるために一緒に過ごしたい対象として配偶者を挙げるか否かである。中高年女性たちの配偶者志向の低さには、男性よりも友人関係やソーシャルネットワークが豊かという積極的な要因とともに、配偶者の形骸化した関係性に失望したという消極的な要因も反映されていると推察される。

こうした男女の差異は、結婚生活を共同で営んでいる夫婦内で、ステイタスが異なる可能性を示唆する。この点については、研究1の夫妻の組合せの分布で明らかにされた。したがって、対外的には夫婦として円満あるいは調和しているようにみえても、個人の関係性のレベルでは問題を抱えている場合が少なくないと推察される。本研究の知見は、高齢期夫婦に対する社会支援や心理臨床的介入において、配偶者との関係性の様態とその組合せを視野に入れておく必要性を示唆していると考えられる。その内、関係性拡散型は結婚

生活の文脈だけでなく、高齢期への全般的な適応を意味する主観的幸福感も低く示されたことから（研究2）、このステータスの含まれる夫婦に対しては慎重かつ早急な対応が望まれる。

ところで、関係性の発達に不可欠な、人格的意味づけの必要性を認知しているもしくはかつて認知していたステータスは、関係性達成型、献身的関係性型、妥協的關係性型、関係性拡散型である。これらの人数を合計すると、いずれの調査でも女性が男性を上回っていた。この結果は、女性の方が概して関係性の発達に深く関与し、関係性への志向が強いとする先行研究（例えば、Chodorow, 1978; Markus, & Cross, 1990; 伊藤, 1993）を支持するものである。しかしながら、関係性の概念が女性だけに重視される発達のテーマではなく、男女双方の人格発達において重要との認識が浸透するにつれ（杉村, 1995）、人数分布の性差は徐々に変わってくるかもしれない。

3. 配偶者との関係性の生涯発達とその多様化について

すでに第1章で述べたように、配偶者との関係性は、夫婦人生を通して探求される生涯発達のテーマと考えられる。結婚生活の持続期間が長くなればなるほど、その経路は複雑となり、個人差が大きくなっていく。ここでは、配偶者との関係性の生涯発達の構造について、家族システムの発達と関連づけながら考察してみたい。

岡堂（1992）は、家族システムの発達について次のように述べている。「すべての家族は、一定の諸段階を経過して発達する。心理学的にみると、家族発達の各段階には固有の生活現象があり、すべての家族成員に適応と変化を求める新しい課題がある。これは家族

にとって危機となることがあるし、緊張と組織の動揺がみられる。家族はこの課題に取り組みながら、再組織化することで、安定した状態に達することが可能になる」（岡堂，1992，p. 85）。家族はこの繰り返しによってプロセスを進展させていくものと理解できる。

家族危機（family crisis）には、そうした家族システムの力動的過程の各段階にみられる必然的な「発達の危機」の他に、予期せぬ偶発的な「状況的危機」もある。後者の典型としては、社会的経済的な変動による倒産や失業、災害や事故などがある。したがって、あらゆるライフステージにおいて、配偶者との関係性に揺らぎが生じる可能性が潜んでいることになる。いずれの危機にしても、その対処のあり方には、それまでの関係性が反映される。一方で、関係性はそうした危機を契機に深化・成熟する可能性を有している。その積み重ねによって、関係性は徐々に夫婦人生のなかで歴史的な重みをもつようになる。

そうした主要な移行期の分析は、本論文では研究3で行った。その結果、関係性発達の展開過程は、「Ⅰ：個人の内的危機を認知する段階→Ⅱ：個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置づける段階→Ⅲ：これまでの夫婦関係を見つめ直す段階→Ⅳ：夫婦関係を修正・向上させる段階→Ⅴ：人格的關係としての安定とそれに基づく積極的関与の段階」から構成されていることが示唆された。この研究は回想法であるため、どれほど当時の実相を正確にあらわしているかは定かでない。しかしながら、対象者（26名中6名）の間に共通して確認された過程であったことから、配偶者との関係性が重大なライフイベントにおいて深化・成熟することが実証的に検証されたと考えられる。

こうしてみると、配偶者との関係性は単に現実生活での満足感によってのみ規定されるのではなく（Sprecher, Metts, Burleson, Hatfield & Thompson, 1995）、過去との統合によって形づくられていると考えるのが妥当であろう（Grote & Frieze, 1998）。すなわち、配偶者や結婚生活に対する基本的態度（内在的側面）は、現実生活での相互交渉（外在的側面）と過去の内在的側面とを統合した、帰納的分化によって方向づけられる。同様に外在的側面も、内在的側面の演繹的分化に規定される。

配偶者との関係性の発達には、このように内在的側面と外在的側面とが相互に影響を及ぼし合う循環的プロセスと考えられる。むしろ、これは発達の危機や状況的危機といった人生の主要な局面だけでなく、日々の生活においても当てはまる。むしろ配偶者との関係性は、結婚生活の継続のなかで絶えず変容を遂げているのではないだろうか。

この循環は、死別あるいは離婚によって結婚生活が解消されるまで継続されると考えられる。たとえ現実生活で相互交渉がなくなったとしても、当人にとってその間柄が重要であるかぎり、内在的側面は存在し続けるであろう。そのことは、研究4の想定された死別場面での配偶者に対する言葉掛けで、関係性達成型の女性の一部に「内在化により絆は存在しつづけるあるいは看取った側が死ぬことで再び絆は結ばれるという関係の永続性を示す記述」がみられたことからもうかがえる。

4. 本研究の意義

これまで我が国では、配偶者との関係性に関する研究が十分に行

われてこなかった。既存の研究も、その大半は新婚期や子育て期の夫婦を対象としており、高齢期夫婦の実証的研究となるとわずかである。しかしながら、そうした研究の現状とは裏腹に、我が国の高齢化は着実に進み、高齢期夫婦の数は増加の一途をたどっている。一方で、永続性の観念が弱まり、離婚率の上昇がみられる。まさに個々人が結婚の意味を真剣に吟味しなければならない時代が到来したといえる。

その意味において、本研究は学問的にも社会的にも意義は大きいと考えられる。新たに提案した関係性ステータスの枠組は、これまで未開拓であった夫婦の関係性に関する発達的研究を進めていく上で有効なアプローチとなろう。また、本研究で得られた知見は、教育実践の場にも有益な示唆を提供できるものと期待される。学校教育だけでなく、我が国ではまだ実施されているところは少ないが、成人を対象とした家族教育（夫婦関係改善プログラムの開発など）にも還元できる可能性はあるだろう。

第2節 本研究の限界と今後の課題

1. 本研究の限界

ここで本研究の限界として、対象者の属性の問題を指摘しておかなければならない。本研究の知見は、いずれも広島県在住の高齢者大学受講者とその配偶者から得られたものである。したがって、今回確認された人数分布がどれほど普遍性をもっているかという問題は、今後様々な文化的、社会的、経済的水準に属する人々を対象に調査を重ね、検討していくことが求められる。

また、本研究では、関係性達成型と表面的関係性型を中心に分析

を進めてきた。献身的関係性型や関係性拡散型といった、結婚生活に適応できていない人々（そしてその配偶者）からデータを得るのは大変難しい。しかし、そうしたステイタスには関係性発達の重要な手がかりがあると思われるため、研究者倫理を念頭に置いた上で可能な限り該当者を募り、分析を行っていく必要がある。

2 今後の研究課題と長期的展望

今後の課題であるが、まず本研究の限界でも触れたように、基本属性とステイタス分布の関連性を引き続き検討していくべきであろう。研究1の分析から、年齢にともなう変化やコホートの影響がうかがえる結果が示された。すなわち、高齢群（70歳以上）および結婚年数が長期に及ぶ群において、関係性を探求していない表面的関係性型が有意に多く認められた。そうしたステイタス分布は高齢期の発達的特質なのか、それとも文化的、歴史的要因によって強く規定されているのであろうか。

この他に注目すべき要因として、健康状態が挙げられる。すなわち、主観的健康評価の低い群に関係性の成熟を半ばあきらめた妥協的關係性型や現在模索中の献身的関係性型が有意に多い傾向が示された。身体的衰退とともに、ステイタスは変容を遂げるのであろうか。また、家族構成では夫婦のみの世帯に、関係性達成型が有意に多くみられた。彼らは結婚当初より成熟的な関係性を有し、自らの意志で夫婦だけの生活を行っているのか、それとも何らかの外的要因によって二人での生活を余儀なくされ、それに適応する形で関係性を発達させてきたのであろうか。こうした問いを解明していくためには、さらなる研究の蓄積が必要である。

また基本的属性に関しては、本研究で検討した現在の要因だけでなく、夫と妻の職業経歴（職種や地位およびそれに伴う居住地の変化など）や中高年期の家事・育児の役割分担等、それまでのライフコース、ライフスタイルに関わる諸要因との関連についても、今後取り組んでいく必要があると考えられる。

ところで、本研究の対象者は高齢期でもその多くが高齢前期に位置し、心身ともに健康な人が多かった。彼らの支えている関係性は現時点で安定していても、加齢にともない生じてくる自己と配偶者の内的小および外的な喪失体験を契機に、変容を余儀なくされるかもしれない。したがって、それらの事象における、関係性発達の展開過程を明らかにすることは今後の重要な課題と考えられる。加えて、死別後の適応において、生前の関係性がどのような意味を有するかについても探究していきたい。

以上はすべて高齢期を対象とした研究課題であるが、長期的には関係性の生涯発達経路とその関連要因を明らかにしていきたいと考えている。そのためには、高齢期以外のライフステージに属する夫妻も分析対象として取り入れていく必要がある。また、独身青年を対象とした配偶者選択に関する研究も、関係性の生涯発達の研究には不可欠と考えられる。とくに父母双方の関係性と両者の適合性が、子どもの結婚に関する意思決定に及ぼす影響力については大変興味深いところである。

3. おわりに－関係性研究の発展に向けて－

近代家族の成立過程を辿ると（例えば上野, 1994; 山田, 1994）, 戦前のイエ制度における権威構造に加え、戦後の役割関係が夫と妻

の生き方を同一の指標で測れないようにしていたことは明らかである。権威構造は、夫唱婦随をよしとする男性主導の一心同体規範を、一方役割関係は、夫婦でそれぞれの性にふさわしい役割を相補的に遂行し、家庭の安定に関心とエネルギーを注ぐべきとの組織優先規範（家庭の安定は個人の幸福を意味するとの直線的関係が仮定される）を人々に浸透させた。これらの規範が自然なものとして受け入れられていた時代では、夫婦を一個人と一個人の関係とする視点は必要とされなかった。必然的に社会問題としてあがることは少なく、研究対象とされなかったのである。

未婚・既婚の区別はあっても無婚という言葉が存在せず（河野，1992），結婚は選択の余地がない強制的メカニズムの色が濃かった我が国も、家族の相対化，多様化の兆しがみられる（篠崎，1996）。すなわち，時代は既存の家族中心パラダイムから，個人中心パラダイムへの転換を迫っている（神原，1991）。特に，女性が男性と同等に働ける職場環境や，単親家族でも子どもを育てられるサポート環境が整えば，いずれの家族発達段階であっても，財布と子どもでつながっていたような夫婦は結婚生活を継続する所以がなくなるかもしれない。そういった社会状況において，結婚生活を持続させようとするれば，システム安定を目的としたコミットメントだけではなく，親密性に基づくコミットメントも不可欠になるのではないだろうか。また，どちらか一方に過剰な負担をかけるといった状況も避けなければならない（山田，1994）。

親密性に基づくコミットメントは，配偶者を自分とは異なる他者，別人格の持ち主としてとらえるスタンス（守屋，1995；山田，1994）を前提としている。そのうえで，その相手とともに生きることに高

い価値を見出し、人格を尊重した関わりの必要性を見失わない、また実際の関与にそれを反映させることが期待される。こうした姿勢は、必然的に一方に過剰な負担をかけることを許さない。男女双方の自立と生物学的な性に規定されない柔軟なパートナーシップ（ジェンダーフリー）が叫ばれている今日、制度だけに頼らない主体的な関係性の構築が求められている。

引用文献

- Bernard, J. 1972 *The Future of Marriage*. New York: World Publishing.
- Blood, R. O., & Wolfe, D. M. 1960 *Husbands and Wives: The Dynamics of Married Living*. New York: The Free Press.
- Bradbury, T. N. 1995 Assessing the four fundamental domains of marriage. *Family Relations*, 44, 459-468.
- Chodorow, N. 1978 *The reproduction of mothering*. Berkeley: University of California Press. 大塚美津子 (訳) 1981 母親業の再生産 新曜社
- Deeken, A. 1995 Grief education and bereavement support in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 49, 129-133.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton. 仁科弥生 (訳) 1977, 1980 幼児期と社会 I, II みすず書房
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. 1986 *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton. 朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) 1990 老年期—生き生きしたかわりあい— みすず書房
- Flandrin, Jean-Louis. 1981 *Le sexe et l'Occident*. Paris: Seuil. 宮原信 (訳) 1987 性と歴史 新評論
- Fowers, B. J. 1990 An interactional approach to standardized marital assessment: A literature

- review. *Family Relations*, 39, 368-377.
- Glenn, N. 1990 Quantitative research on marital quality in the 1980s: A critical review. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 818-831.
- Grote, N. K., & Frieze, I. H. 1998 Remembrance of things past: Perceptions of marital love from its beginnings to the present. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 91-109.
- 堀内かおる・天野寛子・伊藤純 1997 家事労働観と生活時間から見る夫妻のジェンダー関係－1995年世田谷区在住労働者夫妻の調査から－ 日本家政学会誌, 48, 851-864.
- 細江容子 1980 定年退職後夫婦の生活適応 老年社会科学, 2, 169-181.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, 41, 293-301.
- Johnson, M. P. 1991 Commitment to personal relationships. In W. H. Jones & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships : Vol. 3* (pp. 117-143). London: Jessica Kingsley.
- 神原文子 1991 現代の結婚と夫婦関係 培風館
- 神原文子 1996 夫婦関係研究のレビューと課題－1970年代以降の実証研究を中心に－ 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美(編) いま家族に何が起きているのか ミネルヴァ書房, pp. 159-186.
- 河合千恵子 1990 配偶者を喪う時 廣済堂

- 河合千恵子 1992 共白髪の夫婦像 岡堂哲雄(編) 現代のエスプリ別冊 マリッジ・カウンセリング 至文堂, pp. 191-207.
- 河野稠果 1992 配偶関係別の死亡率と結婚の生命表について 家族心理学年報10 家族の離別と再生 金子書房, pp. 87-96.
- 川島武宜 1957 イデオロギーとしての家族制度 岩波書店
- 厚生省 1998 平成10年度厚生白書
- Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89.
- Lederer, W. J., & Jackson, D. D. 1968 *The Mirages of Marriage*. New York: W. W. Norton.
- Levenson, R. W., Carstensen, L. L., & Gottman, J. M. 1994 The influence of age and gender on affect, physiology, and their interrelations: A study of long-term marriages. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 56-68.
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of Man's Life*. New York: Alfred A. Knopf, Co. 南博(訳) 1980 人生の四季 講談社
- Levitz-Jones, E. M., & Orlofsky, J. L. 1985 Separation-Individuation and intimacy capacity in college women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 156-169.
- 前田尚子 1988 老年期の友人関係-別居子関係との比較検討- 社会老年学, 28, 58-70.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.

- Marcia, J. E. 1976 Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.
- Markus, H., & Cross, S. E. 1990 The interpersonal self. In L. Pervin (Ed.), *Handbook of personality theory and research* (pp. 576-608). New York: Wiley.
- 松田健 1996 「コミットメント」と日本人の勤勉性・集団主義について 関西外国語大学研究論集, 64, 427-442.
- 三宅俊治・久世淳子・谷口俊治 1997 高齢者における不安について(9)－孤独感と不安3因子の関連について－ 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 154.
- Molinari, V. & Reichlin, R. E. 1985 Life review reminiscence in elderly: A review of literature. *International Journal of Aging and Human Development*, 20, 81-92.
- 守屋慶子 1995 自立を助け合う家族の創造 柏木恵子・高橋恵子(編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房, pp. 102-113.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- 直井道子 1993 高齢者と家族 サイエンス社
- Nock, S. L. 1995 Commitment and dependency in marriage. *Journal of Marriage and the Family*, 57, 503-514.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究, 31, 332-336.
- 岡堂哲雄 1991 家族心理学講義 金子書房
- 岡堂哲雄 1992 家族のライフコースと発達段階 岡堂哲雄(編)

- 家族心理学入門 培風館, pp. 85-95.
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子 1986 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究, 34, 352-358.
- 岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房
- 岡村清子 1991 団地居住老人の余暇活動 社会老年学, 33, 3-14.
- 岡村清子 1992 高齢期における配偶者との死別と孤独感—死別後経過年数別にみた関連要因— 老年社会科学, 14, 73-81.
- Orlofsky, J. L., Marcia, J. E., & Lesser, I. M. 1973 Ego identity status and the intimacy versus isolation crisis of young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 211-219.
- 長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関する研究 発達心理学研究, 5, 1-10.
- Reedy, M. N., Birren, J. E., & Schaie, K. W. 1981 Age and sex differences in satisfying love relationships across the adult lifespan. *Human Development*, 24, 52-66.
- Reinke, B. J., Holmes, D. S., & Harris, R. L. 1985 The timing of psychosocial changes in women's lives: The years 25-45. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1353-1364.
- Reynolds, W., Remer, R., & Johnson, M. 1995 Marital satisfaction in later life: An examination of equity,

- equality, and reward theories. *International Journal of Aging and Human Development*, 40, 155-173.
- Robinson, L. C. & Blanton, P. W. 1993 Marital strengths in enduring marriages. *Family Relations*, 42, 38-45.
- Rusbult, C. E. & Buunk, B. P. 1993 Commitment processes in close relationships: An interdependence analysis. *Journal of Social and Personal Relationships*, 10, 175-204.
- Sabatelli, R. M., Cecil-Pigo, E. F., & Pearce, J. 1982 *Marital satisfaction and family life transitions : A social exchange perspective*. Paper presented at the annual meeting of the National Council on Family Relations, Washington, DC.
- 下仲順子 1988 老人と人格 川島書店
- 下仲順子・中里克治・河合千恵子 1990 老年期における性役割と心理的適応 社会老年学, 31, 3-11.
- 下坂知恵・下村道子 1996 男性の家事行動に対する余暇としての意識 日本家政学会誌, 47, 121-129.
- 篠崎正美 1996 日本家族の現代的变化と家族変動の諸理論 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美(編) いま家族に何が起きているのか ミネルヴァ書房, pp. 323-357.
- 袖井孝子・都築佳代 1985 定年退職後夫婦の結婚満足度 社会老年学, 22, 63-77.
- Sprecher, S., Metts, S., Burleson, B., Hatfield, E., & Thompson, A. 1995 Domains of expressive interaction in intimate

- relationships. *Family Relations*, 44, 203-210.
- Stanley, S. M., & Markman, H. J. 1992 Assessing commitment in personal relationships. *Journal of Marriage and the Family*, 54, 595-608.
- Stinnet, N., Collins, J., & Montgomery, J. E. 1970 Marital need satisfaction of older husbands and wives. *Journal of Marriage and the Family*, 32, 428-434.
- 杉村和美 1995 ライフサイクル—男性と女性— 南博文・やまだようこ(編) 老いることの意味—中年期・老年期—:講座生涯発達心理学5 金子書房, pp.117-152.
- Surra, C. A., Arizzi, P., & Asmussen, L. A. 1988 The association between reasons for commitment and the development and outcome of marital relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 47-63.
- Surra, C. A., & Hughes, D. K. 1997 Commitment processes in accounts of the development of premarital relationships. *Journal of Marriage and the Family*, 59, 5-21.
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- Swensen, C. H., & Trahaug, G. 1985 Commitment and the long-term marriage relationship. *Journal of Marriage and the Family*, 47, 939-945.
- 高橋裕行 1988 同一性と親密性の危機の解決における性差 教育心理学研究, 36, 210-219.
- 高橋恵子・柏木恵子 1995 発達心理学とフェミニズム 柏木恵子

- ・高橋恵子(編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房
, pp. 1-16.
- 高橋久美子 1980 定年退職後の夫婦適応 社会老年学, 13,
21-35.
- 高橋久美子 1989 老年期における配偶者喪失—死別への準備と適
応— 日本家政学会誌, 40, 575-585.
- 高橋正人 1991 老夫婦の配偶者満足度 社会老年学, 33, 15-25.
- 高橋正人 1993 老年期の家族関係 井上勝也・木村周(編) 新版
老年心理学 朝倉書店, pp. 72-88.
- 玉野和志・前野大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Liang, J
1989 日本の高齢者の社会的ネットワークについて 社会老
年学, 30, 27-36.
- 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1995a アイデンティティ
研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版
- 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1995b アイデンティティ
研究の展望Ⅲ ナカニシヤ出版
- 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1997 アイデンティティ
研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 東京都情報連絡室 1994 高齢社会に関する世論調査
- 都築佳代 1984 定年退職後夫婦の伴侶性 老年社会科学, 6,
76-90.
- 上野千鶴子 1994 近代家族の成立と終焉 岩波書店
- 渡邊恵子 1996 自立再考—女性の自立・男性の自立— 柏木恵子
・高橋恵子(編) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書
房, pp. 77-101.

- Waterman, A. S. 1982 Identity development from adolescence to adulthood: An extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, 18, 341-358.
- Weishaus, S., & Field, D. 1988 A half century of marriage: Continuity or change? *Journal of Marriage and the Family*, 50, 763-774.
- Whitbourne, S. K., & Weinstock, C. S. 1979 *Adult development: The differentiation of experience*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- White, K. M., Speisman, J. C., Jackson, D., Bartis, S. & Costos, D. 1986 Intimacy maturity and its correlates in young married couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 152-162.
- 山田昌弘 1994 近代家族のゆくえ 新曜社
- 山田侃 1994 夫婦関係の調整 岡堂哲雄(編) 現代のエスプリ別冊 つれあいの心理と幸福 至文堂, pp. 172-184.
- 山岸俊男 1998 信頼の構造 東京大学出版会
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 36, 238-248.
- 横山博子 1993 老年期の家族 柴田博・芳賀博・長田久雄・古谷野亘(編) 老年学入門 川島書店, pp. 195-199.

資 料

資料 1

【結婚満足感尺度】(袖井・都築, 1985)～研究1～

- ①私は妻(夫)といると安らいだ気持ちになれます
- ②妻(夫)は私に思いやりを示してくれます
- ③妻(夫)は私の嫌がることをしないようにしてくれます
- ④私は妻(夫)に何でも気楽に話せます
- ⑤妻(夫)は私はこれまで成し遂げてきたことを認めてくれている
と思います
- ⑥私と意見が対立する時、妻(夫)は何とか妥協点を見出そうと努
力してくれます
- ⑦妻(夫)は私に何でも気楽に話してくれます
- ⑧妻(夫)は私の欠点だけではなく、長所も認めてくれていると思
います
- ⑨妻(夫)は毎日の生活を楽しく意味のあるものにするよう協力し
てくれます
- ⑩私が何かしようとする時には、妻(夫)はたいてい励ましてくれ
ます
- ⑪妻(夫)は私が生きがいをみつけられるよう助けてくれます
- ⑫全体的にみて私は妻(夫)に満足しています
- ⑬もう一度生まれ変わるとしても、同じ人と結婚したいと思います

資料 2

【改訂版P. G. C. モラール・スケール】 (Lawton, 1975) ～研究2～

- ①自分の人生は、年をとるにしたがって、だんだん悪くなっていくとあなたは感じますか
- ②あなたは去年と同じように元気だと思っていますか
- ③さびしいと感じることがありますか
- ④最近になって、小さなことを気にするようになったと思いますか
- ⑤家族や親戚や友人とのいききに満足していますか
- ⑥あなたは年をとって、前よりも役立たなくなったと思いますか
- ⑦心配だったり気になったりして、眠れないことがありますか
- ⑧年をとるということは、若い時に考えていたより、よいと思いますか
- ⑨生きていても仕方がないと思うことがありますか
- ⑩あなたは若い時と同じように幸福だと思いますか
- ⑪悲しいことがたくさんあると感じますか
- ⑫あなたは心配なことがたくさんありますか
- ⑬前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか
- ⑭生きることは大変きびしいと思いますか
- ⑮今の生活に満足していますか
- ⑯物事をいつも深刻に考える方ですか
- ⑰あなたは心配事があると、すぐおろおろする方ですか

資料 3

【平等主義的性役割態度スケール短縮版】（鈴木，1994）～研究5～

- ①女性は，家事や育児をしなければならないから，フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい
- ②女性のいるべき場所は家庭であり，男性のいるべき場所は職場である
- ③主婦が仕事を持つと，家族の負担が重くなるのでよくない
- ④男の子は男らしく，女の子は女らしく育てることが非常に大切である
- ⑤主婦が働くと夫をないがしろにしがちで，夫婦関係にひびがはいりやすい
- ⑥家事や育児をしなければならないから，女性はあまり責任の重い，競争の激しい仕事をしないほうがよい
- ⑦娘は将来主婦に，息子は職業人になることを想定して育てるべきである
- ⑧子育ては女性にとって一番大切なキャリアである
- ⑨結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである
- ⑩結婚後，妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく，旧姓で通してもよい
- ⑪経済的に不自由でなければ，女性は働かなくてもよい
- ⑫女性が，社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのがむずかしくなるから，そういう職業を持たないほうがよい
- ⑬女性の人生において，妻であり母であることも大事だが，仕事をすることもそれと同じくらい重要である
- ⑭女性はこどもが生まれても，仕事を続けたほうがよい
- ⑮家事は男女共同作業となるべきである

資料 4

【家事労働の領域】～研究5～

- ①洗濯
- ②日常の買物
- ③家計の管理
- ④町内の活動
- ⑤食事の支度
- ⑥食後の後片づけ，食器洗い
- ⑦庭の手入れ
- ⑧アイロンかけ
- ⑨部屋の掃除
- ⑩風呂・トイレ掃除
- ⑪ゴミだし

謝 辞

本論文の学位審査過程におきまして、数々の有益なご示唆をいただきました審査委員会の松橋有子 教授(主査)、岡東壽隆 教授、松田文子 教授、平田道憲 助教授、岡本祐子 助教授ならびに中原忠男 教授、松岡重信 教授、樋口聡 助教授をはじめとする事前指導委員会の諸先生方に深く感謝申し上げます。また、調査の実施に際して、快くお引き受けくださった高齢者大学関係者と調査対象者の皆様に心より感謝いたします。さらに、広島大学教育学部家族心理学研究室の皆様には、調査の実施およびデータ処理の作業において親切にご協力くださいました。記して感謝の意を表します。

終わりにになりましたが、恩師の岡本祐子先生には、指導教官として、本論文の構想段階より終始懇切丁寧なご指導を賜りました。また、私の研究テーマが配偶者との関係性発達という未開拓領域であったため、自信を失いかけたときも多々ありましたが、そんなときには温かい励ましのことばで勇気づけてくださいました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。